「肥前杜氏」史試論
―― 集団の歴史と杜氏の素顔 ――

小 林 恒 夫

佐賀県唐津市松南町152-1 佐賀大学海浜台地生物環境研究センター

Experimental Study on the History of "Hizen-toji" that is the Group of the Overseers of Sake-producing Operations who were from Hizen-cho at the Northwest Town in Saga Prefecture

Tsuneo KOBAYASHI

Coastal Bioenvironment Center, Saga University,
152-1 Shonan-cho, Karatsu 847-0021, Japan

要 約

「肥前杜氏」集団は江戸期に発生したと推察されるが、明治・大正期には主に長崎方面の酒造場に出掛けていっていた。その後、昭和戦前期に入り、町内の星賀出身の杜氏・名古屋徳市さんの出現と活躍により、出身地が起源（ルーツ）と考えられる星賀・晴気等の臨海棚田＝半農半漁集落から納所・入野等の上場台地上の畑作集落へと広がりながら人数が増加し、また勤務先も佐賀県内を中心としつつも福岡県等の県外へも広がり、今日の「肥前杜氏」集団の基本形が形成された。戦後も引き続き名古屋杜氏の活躍による「肥前杜氏組合」結成を契機に高度経済成長期に「肥前杜氏組合」のメンバーは更に増加し、一方、同時期にそれまで佐賀県内の清酒製造の主な担い手だった「柳川杜氏」、「芥屋杜氏」あるいは「小値賀杜氏」が撤退していったため、1970年代半ば以降「肥前杜氏」が佐賀県内の清酒製造の主要な担い手となり、いわば佐賀県内の杜氏市場地図が塗り替えられ、これ以降「肥前杜氏の全盛期」＝「黄金時代」が形成された。

杜氏になるまでの修業年数、杜氏経験年数といった点や、大半の蔵人が杜氏になる前に酒造りから引退し、自家農業や農外就業に転業するプロセスも他の地域の酒造従事者と変わりはない。しかし、肥前町の蔵人の就業行動は1973年から始まった国営上場農業水利事業を一大契機とする上場農業の発展過程と深く関わっており、「肥前杜氏」の盛衰過程は「上場台地農業展開の裏面史」を形成する出来事でもあったということができる。

Summary

"Hizen-toji" is the group of the overseers of sake-producing operations from Hizen-cho at the northwest town in Saga Prefecture. They went to Nagasaki district mainly at 19c. And at the beginning of 20c Mr. Tokuichi Nagoya a famous overseers of Sake-producing operation trained many overseers of sake-producing operations. And After world war II he took many active parts in training of overseers of sake-producing operations. As the result many overseers of sake-producing operations appeared at Hizen-cho after 1960s. Until 1960s main overseers of sake-producing operations were from Fukuoka Prefecture and Nagasaki Prefecture, after 1960s it's changed to Hizen-toji. During from 1960s to 1980s the golden age of "Hizen-toji" appeared.

But after 1980s the numbers of "Hizen-toji" decreased rapidly with the decrease of the numbers of Sake-producing factories. Simultaneously many of the members of "Hizen-toji" changed their jobs from sake-producing to farming or to non-farming jobs. As the regional farming developed the numbers of "Hizen-toji" decreased. Therefore the relationship between "Hizen-toji" and the development of regional agriculture are opposite correlated.

キーワード（Key Words）：杜氏（Overseer of Sake-producing Operations）、肥前杜氏（Hizen-toji）、船行（Commute by ship）、臨海棚田地区＝半農半漁村（Coastal Village in where Fishery with Farming is established）、上場台地畑作地区（Upland Areas at Uwaba-daichi）、名古屋徳市（Mr. Tokuichi Nagoya）。

はじめに――本稿の目的（３つ）――

本稿は前稿（註１）の続編である。本稿の目的は３つある。１つは、「肥前杜氏」を集団として把握し、その歴史とくに起源（ルーツ）を探ることである（第１章）。２つは、「肥前杜氏」を個人として把握し、プロフィールを紹介し、杜氏の実像に迫ることである（第２章）。そして３つは、それらを基に当初の課題であった上場台地農漁業の性格付けに関わる若干の考察を加えることである（第３章）。

第１章　「肥前杜氏」集団の歴史

１．九州杜氏の起源

我が国において農漁村からの出稼ぎ者によって冬場に日本酒（清酒）が作られるようになったのが江戸元禄期、すなわち18世紀初頭以降であることは多くの文献が示しており（註２）、いわば常識となっている。そして、この農漁村出身者による酒造りの技術総括責任者が「杜氏」であることは言うまでもない。また、この「杜氏」が決して個別分散的ではなく、地域性をもって「杜氏集団」として発生・展開していることも周知のことである。そして、江戸期に、その杜氏集団の頂点に立っていたのが兵庫県の「丹波杜氏」であったと言われる（註３）。

その後、一方で、この丹波杜氏系統の酒造技術が北陸・東北の東日本に伝播し、18世紀後半に能登・越後・南部といった東日本の代表的な杜氏集団が形成され、また他方で、同じくこの丹波系統の酒造技術が西日本に伝播し、備中杜氏の発生・媒介を通じて、さらにはその先に伊方・芥屋・三潴といった四国・九州の代表的な杜氏集団が形成されたと推察されている（註４）。

こうして、四国・九州の杜氏集団の形成は19世紀前半であった。すなわち、愛媛県西宇和郡伊方村を中心とする伊方杜氏の発祥は1850年代で、師匠は丹波杜氏であったという。また1829年に福岡県三潴郡城島地方で最初に酒造業を開始した江頭家に出入りの農民が三潴杜氏の起源と見られ、さらに福岡県糸島郡芥屋村出身の芥屋杜氏の最初の人と言われる柴田弥市が富士屋佐伯酒造場に奉公に入ったのが1841年であった（註５）。

こうして、江戸末期にはすでに九州においても杜氏集団（「九州杜氏」）が形成されていたことが分かる。しかし、さらにその起源に迫ろうとすると、九州杜氏の歴史に関する第一人者と目される加藤百一でさえ「九州杜氏の起源をきわめることは至難である」（註６）と述べ、主に福岡県関連の史料を基に、以下のような諸点を示しているにとどまる。

①すでに15世紀において九州の主な酒として肥前の唐津酒の名前があった。
②九州においても17世紀末に杜氏が発生していたと考えられる。
③小倉藩領内では18世紀に酒造屋数が激増したという記録が残されている。
④19世紀前半に福岡県筑紫の喜作、19世紀後半に福岡県山門郡野中村の次平といった杜氏が活躍した記録がある。
⑤17世紀後半に肥前・平戸に上方から杜氏・麹師が下ってきていたが、それが丹波杜氏かどうか、また彼らと九州杜氏との関係については不明である。

もちろん、以上のような加藤氏の指摘によって九州杜氏の起源に迫る推測の可能性が高まったわけであるが、しかし、その中で我々の探し求めている肥前・佐賀に関する情報は残念ながら目下まだ得られていない。

２．「肥前杜氏」集団の歴史

以上の点を踏まえ、私は佐賀県肥前町出身の「肥前杜氏」集団は以下のように推移してきたと推察している。

①江戸藩政期
②明治・大正期
③昭和戦前・戦時期
④戦後・高度経済成長期

そこで、以下、これらの順序に沿ってその内容と特徴を提示してみたい。

（１）江戸藩政期

『伊万里市史』に、井出野地区（現在の伊万里市北部地区）の農民が代官所から「往来手形」を取得して「10月から翌１月まで伊万里の酒造りに雇われたり、平戸領早岐へ出稼ぎに出かけている」と書かれている（註７）。すなわち、既に江戸期に周辺の農村から伊万里への酒造出稼ぎが見られたということである。このことから、当時、

肥前町からも同じように伊万里方面への酒造り出稼ぎが行われていたのではないかと推測される。のみならず、（2）で述べるように、明治・大正期の肥前杜氏の主要な酒造り出稼ぎ先が長崎方面であったことを考慮するならば、肥前町出身者も伊万里方面だけでなくその先の「平戸領」（長崎方面）へも酒造り出稼ぎに出掛けていたことを推察することも不可能ではない。なお、時期については記載がないため不明である。

（2）明治・大正期――半農半漁村から長崎県（大半）・伊万里市（一部）方面へ――

明治以降についても、肥前杜氏の実態を示す手がかりは少ないが、幸い肥前町入野集落出身の井上論杜氏が生前にまとめた『入野村杜氏』（2000年9月）が残されており、それには過去にさかのぼって知りうる限りの杜氏名、出身集落名、酒造場名、勤務地名が記載されているだけでなく、併せて各杜氏が杜氏として活躍した時期が、「明治～大正」、「大正」、「大正～昭和」、「昭和」、「昭和～平成」の5つに区分されて示されている。そして、以下の（第2章）で示す杜氏の調査結果と照らし合わせたところ、20人の調査杜氏事例の全てにおいてこの資料の「昭和」と「昭和～平成」の時期区分が正確に適合していたことから、それ以前の「大正～昭和」、「大正」、「明治～大正」の時期区分も信憑性が極めて高いものであると判断される。そこで、本節では、この資料の時期区分に全面的に依拠して明治以降の肥前杜氏の動きを検討することとしたい（註8）。

そこでまず、「明治・大正」期の杜氏の概要を表1に示した。これらは井上氏が知りうる限りの杜氏名を挙げたものであるから、実際にはこれら以外にもおそらく年配の杜氏たちが更に存在したものと推測されるため、この名簿に載っている杜氏数以上の「肥前杜氏」数が存在したことは確実である。

ともあれ、この名簿の中から「明治～大正」期、「大正」期、そして参考のために「大正～昭和」期の杜氏名とその勤務先を抜き書きしたのが表1である。この表は以下のような事柄を教えてくれる。

1つは、出身集落に見られる特徴である。すなわち、「大正～昭和」期をさしあたり除き、「明治～大正」期と「大正」期に限るならば、まず杜氏の出身集落が晴気を中心に、星賀、駄竹というように臨海の棚田集落である点である。このことは後述（本節の3.）するように、そもそも肥前町自体が東松浦半島（上場台地）の中でも耕地面積の少ない地域であるが、そのような肥前町の中でもこれらの集落は更に農地面積の少ない集落であり、したがってそのことを補う意味で漁業も行われている半農半漁村であるという共通点が浮かび上がってくる。

2つは、同じく「明治～大正」期と「大正」期に限れば、酒造場の所在地、すなわち杜氏がどこに働きに行っていたかという点に見られる特徴である。駄竹出身の井上宇多さんと坂本作五郎さんは集落内と隣町の伊万里市に出掛けていたが、それ以外の晴気出身者を中心とした6人は今福町、御厨村、平戸市というように長崎県方面に出ていたことが注目される。すなわち、一部が地元へ、大半が長崎方面へ出て行っていたのである。

3つは、少し先走ることになるが、大正～昭和期に目を移すならば、酒造場の所在地については、この時期に活躍した杜氏8人の中で大半の7人が長崎方面に出ており、また所在地としては10件が記録されている中で、大半の7件が長崎方面の酒造場であることから、上記の明治～大正期と基本的に変わりはない。但し、晴気出身の坂本佐太郎さんが、最後の勤務酒造場として福岡県に出掛けていることは、その後、昭和期に入ると福岡県が肥前杜氏の出稼ぎ先の有力な地域の1つとなっていくことの前兆と見ることができる。また、出身集落についても、大正～昭和期に入ると、晴気、駄竹といった臨海棚田・半農半漁村出身者が依然圧倒的に多いのではあるが、納所、入野といった上場台地上の畑作集落からの出身者も見られるようになり、若干の変化が認められる。

以上のことから、以下のように結論づけることができよう。

a．明治・大正期は、肥前杜氏の主要な出身地区は、晴気、星賀、駄竹に代表される臨海棚田集落＝半農半漁村であり、これらの集落が「肥前杜氏の発生集落」であったと見られる。

b．そして、その後、大正～昭和期に入ると、出身集落が、入野、納所といった臨海地＝半農半漁集落の背後地、すなわち東松浦半島の台地の上の畑作集落へと拡大していったと考え

表１　明治・大正期における杜氏とその勤務先

時期	杜氏名	杜氏の出身集落名	酒造場名	酒造場の所在地名
明治～大正	川本愛助	晴気	？	長崎県今福町
	坂口善蔵	晴気	？	長崎県
	坂本吉之助	晴気	？	長崎県御厨村
	岩本治太郎	晴気	？	長崎県平戸市
	井上宇多	駄竹	田中酒造場	伊万里市
	坂本作五郎	駄竹	谷川酒造場	肥前町駄竹
大正	石田弥一郎	星賀	？	長崎県御厨村
	井上長太郎	犬頭	？	長崎県
大正～昭和	諸岡時蔵	晴気	？	長崎県
	岩本重一	晴気	？	長崎県今福町
	岩本重太郎	晴気	？	長崎県御厨村
	井上九蔵	駄竹	高崎屋酒造	長崎県御厨村
	中村寅太郎	納所	高崎屋酒造	長崎県御厨村
	岩本金太郎	入野	久保酒造場	長崎県佐世保市
	諸岡敬造	晴気	斉藤酒造場	伊万里市
	坂本佐太郎	晴気	？	長崎県御厨村
	〃	〃	牟田酒造場	伊万里市
	〃	〃	富士本第三酒造場	福岡県小倉市

られる。

c．杜氏の出稼ぎ先としては、明治～大正期には、町内や隣町（伊万里市）といった地元での就業も一部にはあったが、大半は長崎方面であった。

d．出稼ぎ先に関しては、その後、大正～昭和期に入ると、大半が長崎方面で一部が地元というこれまでの構図は基本的に変わりないものの、福岡県への出稼ぎも端緒的に始まり、新たなうねりが見られる。そして、このことは出身集落の拡大と杜氏数の増加を背景としていたことを暗示している。

さて、図１のように、明治34（1901）年の佐賀県内の市町村別酒造場数の分布状況を示す地図がある。見られるように、当時県内において、肥前町の南隣の伊万里市に15の酒造場があり、東隣の唐津市にも13の酒造場があった。それなのに、肥前町出身の杜氏はなぜこれらの伊万里市や唐津市ではなく主に長崎県方面に出て行っていたのであろうか。

それにはいくつかの要因が関係していたと考えられる。

まず考えられることは、当時の主要な交通手段が船だったからではないだろうか。すなわち、「北九州鉄道が東松浦郡内にバス路線を有して、やや大型のバス運行をしたのは大正十年前後のことである」（註８）という。そのとき唐津・高串（肥前町）間の「有浦線」に約30分ごとにバスが走ったという。こうして、大正初期までは肥前町内から唐津の市街地までは徒歩や牛馬車などで行かなければならなかったのである。それに対して、肥前町内、なかでもその西側の臨海部の晴気・駄竹・星賀・犬頭などから唐津の市街地までの距離と長崎県の今福・御厨までの距離はほとんど変わらないから、船で行くならばこれらの長崎県方面へ行く方が早いし安全でもあった。ただ、当時どのような船で、どのようにして長崎県方面に出掛けたのかは不明であるが、船便は江戸時代以前から発達していたわけだし、しかも臨海部の杜氏は漁民でもあったから、自ら船を持っていた者も少なくなかったと思われる。以上のことを考慮するならば、何らかの方法で長崎県方面に船で出掛ける方が徒歩などで唐津方面に出るよりもはるかに容易であったと考えられる。

そして第２に、唐津市内や伊万里市内の酒造場には古くから柳川杜氏、芥屋杜氏、あるいは小値賀杜氏といった、古くから一定数の人数を抱え、しかも早くから「杜氏組合」を結成して組織的に行動していた先発杜氏集団が活躍していた（註９）のに対し、当時まだ弱小勢力であっただけでなく、組織（杜氏組合）も持たなかった後発杜氏集団の肥前杜氏はこれら佐賀県内の「杜氏市場」に入り込む余地が少なかったからではないかと推測する。そこで、やむをえず、当時はまだそれほど人

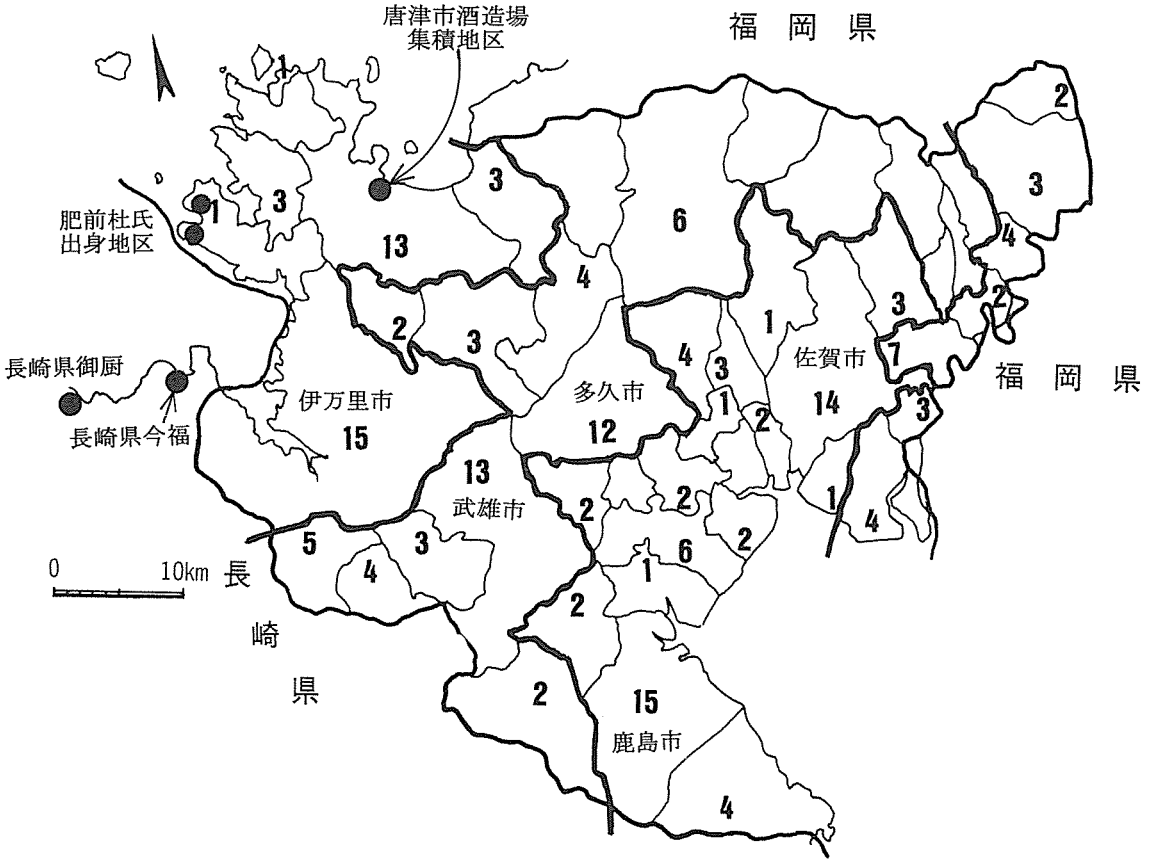


図１　明治34（1901）年の佐賀県内市町村別酒造場数

資料：『重要有形民族文化財　肥前佐賀の酒造用具』大平庵酒造資料館、1990年、２頁の地図に加筆修正。

表２　佐賀・長崎県における税務署別の酒造場数と清酒製造量（明治32年）

県名	税務署	酒造場数 実数（場）	酒造場数 構成比（%）	清酒製造量 実数（石）	清酒製造量 構成比（%）
佐賀県	轟木	11	(6.3)	4,529,478	(6.1)
	佐賀	26	(14.8)	11,859,588	(16.0)
	唐津	30	(17.0)	14,999,495	(20.2)
	うち唐津市	**13**	**(7.4)**	**8,635,845**	**(9.6)**
	小城	24	(13.6)	8,178,090	(11.0)
	武雄	29	(16.5)	10,398,824	(14.0)
	鹿島	23	(13.1)	10,594,644	(14.3)
	伊万里	24	(13.6)	10,595,999	(14.3)
	うち伊万里市	**15**	**(8.5)**	**6,717,702**	**(7.5)**
	神崎	9	(5.1)	3,057,157	(4.1)
	計	176	(100.0)	89,566,822	(100.0)
長崎県	厳原	2	(1.3)	272,473	(0.5)
	長崎	16	(10.6)	6,131,361	(11.6)
	島原	53	(35.1)	14,991,372	(28.4)
	佐世保	19	(12.6)	10,601,009	(20.1)
	福江	12	(7.9)	2,824,195	(5.3)
	諫早	9	(6.0)	3,209,752	(6.1)
	平戸	40	(26.5)	14,773,441	(28.0)
	うち松浦市	**12**	**(7.9)**	**4,179,597**	**(7.3)**
	計	151	(100.0)	56,983,200	(100.0)

資料：『佐賀県酒造史』佐賀県酒造組合、1967年、102～104頁。
註：唐津市とは2006年までの旧唐津市、松浦市は2005年までの旧松浦市。

数も多くなかった肥前杜氏は個人的に長崎県方面に出掛けていっていたのではないだろうか（註10）。

さらに第３に、当時、長崎方面、なかでも松浦市にかなりの数の酒造場が存在していたことが、肥前杜氏を受け入れる条件となっていたことである。表２のように、当時、肥前町西部から唐津市や伊万里市とほぼ同様な物理的距離にある松浦市に、唐津市の13、伊万里市の15とほぼ同数の12の酒造場が存在していたのである。しかも、松浦市の中でも、表１に多く出てきていた今福には６つの、また御厨には３つの酒造場があった。さらに、松浦市の先の平戸市には７酒造場があった（註11）。

では、なぜ、このように松浦市に酒造場が比較的多く立地していたのであろうか。それは、松浦市内に北松炭田があったことが最大要因と考えられる。すなわち、江戸期に発見され、明治期から第２次世界大戦後まで栄えた北松炭田があったため、そこで働く炭鉱労働者への清酒の需要が少なからず形成されたためと考えられるからである。炭鉱労働者数の多さについては、明治７（1874）年の松浦市今福村の世帯構成の中で、最も多かったのは農家の419世帯・1823人だが、次いで多かったのが石炭掘の200世帯・361人であり、これは第３位の士族の31世帯・137人と第４位の雑商の11世帯・43人をはるかにしのぐ数であり（註12）、いわば「今福村は農業と炭鉱の町」と言ってもよい実態にあったことからうかがい知ることができる。

こうして、明治・大正期には、以上のような諸要因の存在の中で、肥前杜氏たちの大半はまずは長崎県、特に松浦市を中心とする平戸方面へ、またごく一部は伊万里市へと船で出掛けていっていたと推測される。

（３）昭和期

①戦前・戦時期――酒匠・名古屋徳市杜氏の活躍による杜氏数の増加――

引き続く昭和期は64年の長きにわたり、たとえば戦前期と戦後期では構造的な違いが存在するため、一括して論じることはできない。しかし、この資料（『入野村杜氏』）では一括して「昭和」と区分されているため、昭和期をさらに分割しての分析はできない。

そこで、「昭和期」と一括されたものではあるが、まずは表３にこの「昭和期」の杜氏の勤務先一覧を表示した。

長きにわたる昭和期の杜氏一覧を先の明治・大正期の杜氏一覧（表１）と単純に比較することはできないが、しかし表３に見られる「昭和期」の杜氏の数の多さから、昭和期になって肥前町出身の杜氏の数が格段に増加したことがまずは推測される。

なお、昭和に入ってからの杜氏数の増加の全体像と要因については、目下のところよく分からないが、大きな要因の１つとして名古屋徳市杜氏の活躍を挙げなければならない。

名古屋徳市さんの酒造り人生については（第２章）で詳述しているが、ここで重要な点は、名古屋さんが昭和８（1933）年に入野村酒造従業員組合を結成し、組織的に杜氏と酒造従業員の養成を図ってきたことである。名古屋さんは「酒造りの神様」と呼ばれたように（註13）、個人的にその人物と酒造技能に優れており、破格の酒造従業員・杜氏数を養成したが、そのような活躍が可能だった重要な要因の１つとして酒造従業員組合という組織の力があったと考えられるからである。

また、名古屋さんは杜氏としてはまず福岡県でも中堅の久留米市の富安酒造で活躍しながら、杜氏を養成していたから、その当時の影響はむしろ福岡県内において大きかったとも推測される。後述するように、昭和期に入って杜氏の勤務先が県外に拡大し、その中では福岡県が最大になったことの要因の１つとして、このような名古屋さんによる福岡県内での杜氏養成が存在していたと考えられる。

表３は全体概要を網羅した一覧表であるため、これを基に杜氏が勤務した酒造所の数を所在地別にまとめたのが表４である。

表４から、昭和に入ると肥前杜氏が最も多く勤務するようになった地域は伊万里市であることが分かる。明治・大正期にも伊万里への酒造り出稼ぎの事例は散見されたが、しかし当時の主要なルートは長崎方面であり、それに比べれば伊万里方面へのルートは極めて少なかった。それが、昭和に入って、両者の関係が逆転したわけであるが、その理由としては、まず、昭和期になって、それ

表３　「昭和期」における杜氏とその勤務先

杜氏名	杜氏の出身集落名	酒造場名	酒造場の所在地名
名古屋徳市	星賀	ﾗﾝｸﾞｰﾝ富安	ﾋﾞﾙﾏﾗﾝｸﾞｰﾝ市
		富安酒造場	福岡県久留米市
		田尻酒造	伊万里市
名古屋東エ門	星賀	平田酒造場	福岡県朝倉町
渡辺忠平	星賀	中村酒造場	福岡県桂川町
名古屋松太郎	星賀	兼行酒造場	鳥栖市
		佐賀県酒造研究所	大和町
渡辺市松	星賀	樋渡酒造場	伊万里市
前田茂治郎	星賀	前田酒造場	伊万里市
北原福造	星賀	田中酒造場	伊万里市
北原東造	星賀	斎藤酒造場	伊万里市
渡辺長治	星賀	樋渡酒造場	伊万里市
		三養基酒造場	鳥栖市
石田政吉	星賀	森光酒造場	伊万里市
渡辺忠二	星賀	平田酒造場	福岡県朝倉町
渡辺二郎	星賀	中村酒造場	福岡県桂川町
名古屋七治	星賀	東木屋酒造場	唐津市
渡辺正清	星賀	樋渡酒造場	伊万里市
		小柳酒造	小城町
渡辺万吉	星賀	西依酒造場	鳥栖市
宗田林一	星賀	川浪酒造場	伊万里市
前田荒吉	星賀	小柳酒造	鹿島市
岩本百蔵	晴気	小林酒造場	福岡県宇美町
		小林酒造場	中国上海市
西村松男	晴気	牟田酒造場	武雄市
		斎藤酒造場	伊万里市
岩本龍吉	晴気	田尻酒造	伊万里市
岩本平吉	晴気	福井酒造場	福岡県長糸村
		重松酒造場	伊万里市
坂本八造	晴気	牟田酒造場	伊万里市
諸岡勇吉	晴気	田中酒造場	伊万里市
岩本 信	晴気	西日本酒造	北茂安町
坂本吉蔵	晴気	田中酒造場	伊万里市
坂本友太郎	晴気	東木屋酒造場	唐津市
坂本甚吉	晴気	楢原酒造	福岡県久留米市
		樋渡酒造場	伊万里市
		田中酒造場	伊万里市
坂本豊蔵	晴気	東木屋酒造場	唐津市
		富安酒造場	福岡県久留米市
岩本年太郎	晴気	白水酒造場	厳木町
		田中酒造場	伊万里市
		富士本第三酒造場	福岡県小倉市
		山下酒造場	呼子町
岩本仁蔵	晴気	樋渡酒造場	伊万里市
川本愛治	晴気	白水酒造場	厳木町
		斎藤酒造場	伊万里市
坂本大輔	晴気	西日本酒造	北茂安町
		小松酒造場	大分県院内町
		後藤酒造場	福岡県豊前市
中村弥太郎	晴気	田中酒造場	伊万里市
岩本 公	晴気	牟田酒造場	伊万里市
		東木屋酒造場	唐津市
		瑞穂菊酒造場	福岡県飯塚市
井上今朝造	駄竹	田代酒造場	武雄市
		村上酒造場	多久市
井上正樹	納所	薗菊酒造場	中国ﾊﾙﾋﾟﾝ市
井上源十	駄竹	村山酒造場	多久市
中山作太郎	納所	福井酒造場	福岡県長糸村
中山守太郎	納所	寒雪酒造場	鳥栖市
中山銀十郎	納所	高田酒造場	大分県大分市
中山 勝	納所	富士本第三酒造場	福岡県小倉市
井上熊一郎	納所	高崎屋酒造場	長崎県御厨町
井上八州馬	納所	光武酒造場	鹿島市
松尾喜市	納所	西牟田酒造	長崎県佐世保市
井上福二	納所	江崎酒造	北茂安町
鶴田 強	納所	江本酒造場	大分県宇佐市
井上弐彦	納所	小柳酒造	鹿島市
中山寿雄	納所	坂本酒造場	大分県宇佐市
中山輝雄	納所	樋渡酒造場	伊万里市
井上真正	納所	松尾酒造場	西有田町
井上正雄	入野	田代酒造場	武雄市
		重松酒造場	伊万里市
		兼行酒造場	鳥栖市
井上弥二郎	入野	木下酒造場	玄海町
井上 諭	入野	樋渡酒造場	伊万里市
諸岡生治	田野	前田酒造場	伊万里市
		峰松酒造	鹿島市
大浦真之	入野	大里酒造	福岡県嘉穂町
江川育志	入野	斎藤酒造場	伊万里市
井上儀三郎	犬頭	富安酒造場	福岡県久留米市
吉村留一	入野	百武酒造	武雄市
山城小太郎	瓜ケ坂	水頭酒造場	鹿島市
名古屋東八	星賀	兼行酒造場	鳥栖市
中山清蔵	納所	吉田酒造	福岡県八女市
井上一義	納所	小柳酒造	鹿島市
井上孝行	納所	牟田酒造場	武雄市

までとは異なって主要な交通手段が船から車になったことによって、船で３～４時間掛かる長崎方面よりも、バス等で２～３時間で行けるようになった隣町の伊万里市へ出ていくことが有利になってきたからであると推測される。また、昭和に入っても伊万里の酒造場に勤めていた杜氏の大半は柳川杜氏であったと推測されるが、それでも、先に述べたように昭和に入って肥前杜氏数が格段に増加したことから、勤務先としてより有利になってきた隣町の伊万里へ出掛ける内的圧力が高まってきたからであると思われる。

２つめの特徴は、伊万里市への勤務件数27件に次いで２番目に多いのが福岡県への勤務件数17件であり、それは県内の各市町村別に見た数値と比べて格段に多い。この点は、大分県と長崎県、さらには海外も含めて考えると、県外への勤務事例が26件を数え、これは全体数86件の３割を占め、少なくない。先に表１で「大正～昭和」期に福岡県への出稼ぎの兆しが見られるとしたが、昭和期に入ってこの動きが全面化し、肥前杜氏は県内だけでなく福岡県を中心に少なくない部分が県外にも勤務するというあり方を示したと見られる。そして、実は、このような姿は、その後今日に至るまでの肥前杜氏の特徴の１つであるのである。

また、関連して、表２に示したように、戦時期と思われる時期には植民地であった中国黒竜江省ハルピン市や出兵先であったビルマ（現ミャンマ

表４　杜氏が勤務した酒造場数
（酒造場の所在地別）

酒造場の所在地	杜氏が勤務した酒造場数
伊万里市	27
福岡県	17
鳥栖市	6
鹿島市	6
武雄市	5
大分県	4
唐津市	4
海外	3
北茂安町	3
長崎県	2
多久市	2
厳木町	2
玄海町	1
呼子町	1
大和町	1
小城町	1
西有田町	1

表５　杜氏が勤務した酒造場数
（杜氏の出身集落別）

杜氏の出身集落名	杜氏が勤務した酒造場数
晴気	31
星賀	23
納所	20
入野	8
駄竹	3
田野	2
瓜ケ坂	1
犬頭	1

ー）ラングーン（現ヤンゴン）市、および中国上海市の海外支店への出稼ぎすら見られたのである（註14）。このことは、この時期に肥前杜氏数が増加したことの証拠の１つと見られる。

次いで、表３を基に出身集落別に杜氏の勤務した酒造場数を整理して示したのが表５である。

表５から、先に指摘した「肥前杜氏のルーツは晴気・星賀の臨海棚田地区の半農半漁村」という姿は昭和期に入っても基本的に保持されているが、しかし同時にこれも上述したように「大正～昭和」期に認められた「臨海棚田＝半農半漁村から上場台地＝畑作地区への杜氏の拡張」という変化が昭和期に入って加速し、晴気・星賀といった臨海棚田＝半農半漁集落出身者数35人と圧倒的に多い中でも、納所・入野・田野といった上場台地上の畑作集落出身者も24人と全体の４割近くを占めるに至り、「肥前杜氏の出身地の中心地はそのルーツと見られる臨海棚田地区＝半農半漁集落だが、その後に拡大してきた上場台地上の畑作集落出身者の割合が高まってきた」という、これまた今日に至るまでの肥前杜氏の基本形が昭和期にできあがったと考えられる。

こうして、昭和期に入って、出身地は晴気・星賀といった臨海棚田地区＝半農半漁村をルーツとし、かつ中心とするが、上場台地上の畑作地区にも広がっており、また勤務先の大半は隣接の伊万里市を中心とする県内だが、少なくない部分が県外にも出るという、現在に至る肥前杜氏集団の基本的なあり方ができあがったと見られる。なお、これらの事柄を数字を交えて思い切って言い換えるならば、臨海棚田＝半農半漁集落出身者が６割、上場台地上の畑作集落出身者が４割という出身集落構成、および伊万里市を中心とする県内への勤務件数が７割、県外への勤務件数が３割という勤務先構成、というその後今日に至るまでの肥前杜氏集団の特徴と言える内容を持つ基本形が昭和期に入って形成されたと考えられる。

②戦後高度経済成長期
――昭和戦前期タイプの継承と発展（「肥前杜氏」の全盛期＝黄金時代）――

図２に肥前町出身の現役杜氏の経年的推移を示した。肥前町出身の杜氏数が明確に分かるようになるのは、昭和25（1950）年以降である。その数値は昭和32（1957）年に建立された酒匠・名古屋徳一杜氏の頌徳碑の碑文から知ることができる。それによると、第２回入野村酒造従業員組合を結成（再結成）した昭和25（1950）年に肥前杜氏が23人、酒造従業員（蔵人）が250人いたとしるされている。なお、名古屋さんは昭和８（1933）年に初めて入野村酒造従業員組合を結成したのであるが、そのときの酒造関係者の数は残念ながらしるされていない。その後戦争によって酒造業への規制の強化に伴って杜氏組織の活動も制約されたと推測される。そこで、戦後になって、新たな状況下で、名古屋さんの主導によって、昭和25（1950）年に改めて入野村酒造従業人組合

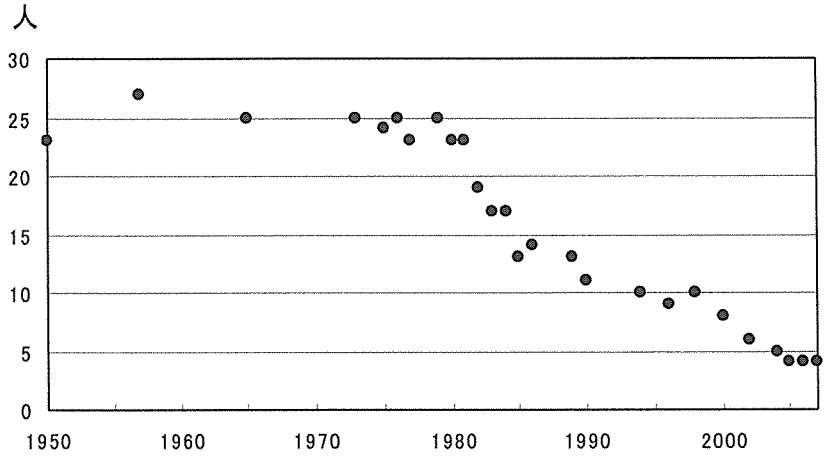


図２　肥前杜氏数の推移

資料：九州酒造杜氏組合資料、名古屋徳市翁頌徳碑、および聞き取り調査。

が結成（再結成）されたということである。

この再出発した新しい従業員組合においても名古屋さんは組合長を務めて後輩の育成に尽力したわけであるが、このとき名古屋さんは伊万里市の松浦一酒造場において杜氏を務めていたことから、名古屋さんの活動の主舞台は佐賀県内に移ったため、この組合活動をも含めて、この期間において肥前町出身者を中心に多くの杜氏や蔵人が養成された。たとえば、第２章の調査事例で示すならば、山口徳市さん、諸岡生治さんは代表的な名古屋門下である。

昭和25（1950）年以前の杜氏数や蔵人数は不明なため、肥前杜氏数が最も多かったピーク年がいつだったのかは目下不明であるが、改めて杜氏組合が結成されたことによって、杜氏養成の態勢が本格的に整ったと考えられるため、むしろ1950年以降に本格的に杜氏が養成されたと見てよいのではなかろうか。調査期間中、ある杜氏から「28人になった年があった」、またある引退杜氏からは「杜氏数30人を目標としていたと記憶している」ということを伺った。すなわち、肥前杜氏数は30人を超えたことはなく、図から1950～1980年の間にピーク年が形成されたと判断される。

図からは、1950年以降、杜氏数は増加したと言うよりもむしろ25人前後を維持していたように見られる。ところで、この期間は、日本全体や九州全体および主要な杜氏組織における杜氏数が一貫して減少傾向を示していたわけだから（註15)、そのような動きに対して、肥前杜氏集団が昭和55（1980）年頃まではむしろ25人前後のメンバーを維持してきた点が注目される。

こうして、戦後の高度経済成長期において肥前杜氏数は増加ないし維持傾向を示し、これらの多くの肥前杜氏が活躍したのである。すなわち、この時期が肥前杜氏集団の全盛期であったと見ることができる。

また、この時期は、前稿（註１）で見たように、佐賀県内の清酒製造の担い手という観点から見ても、1960年代半ばまではそれは柳川杜氏であったが、肥前杜氏数の増加ないしそれ以降のしばらくの間の維持によって、1970年代半ばには、肥前杜氏が県内清酒製造の主要な担い手となるように変化してきた時期でもあった。その意味で、この時期は、肥前杜氏の黄金時代であったと言うことができよう。

３．「肥前杜氏」のふるさと

（１）「肥前半島」４集落（濃密集落＝晴気・星賀と散在集落＝納所・入野）に集中

次に、肥前杜氏の出身地区の特徴について見ていきたい。

図３は『入野村杜氏』に掲載されている杜氏経験者数を出身集落別に示したものである。前述のように、これが肥前杜氏全員ではないが、明治以降の大方の数字と見てよい。杜氏数が最も多いのは晴気の30人で、面積狭小の臨海棚田＝半農半漁集落から多くの杜氏が輩出されている様子が分

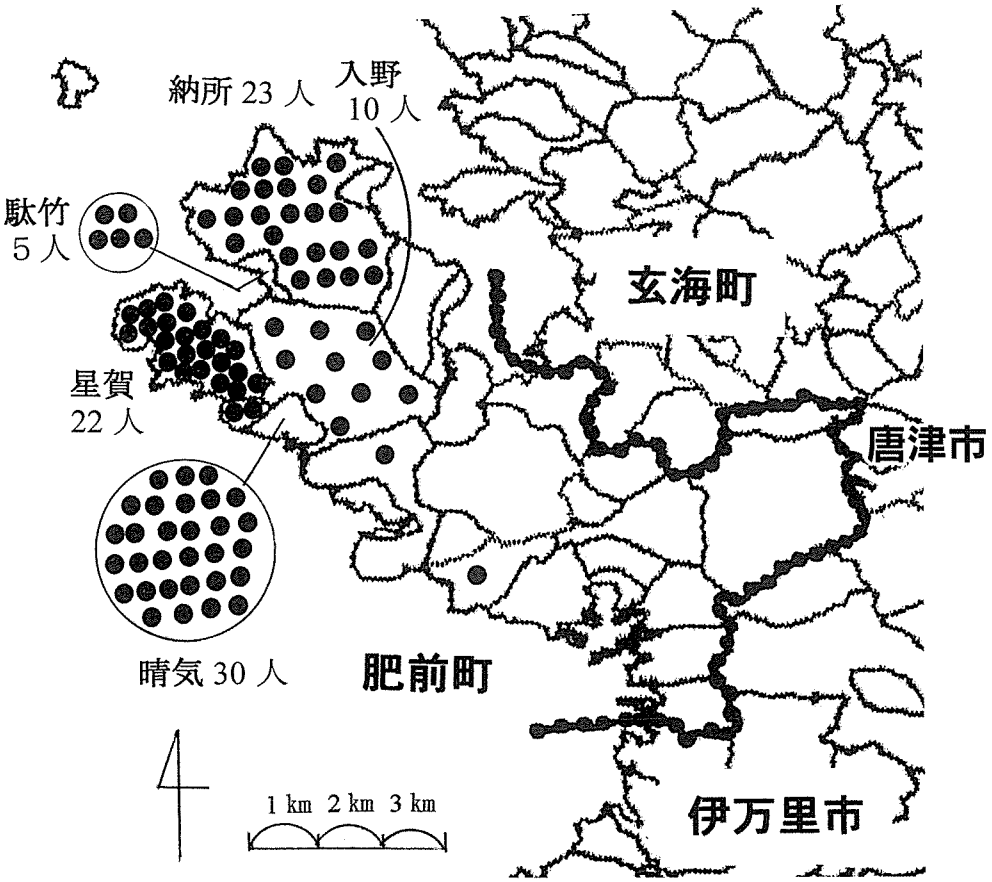


図３ 集落別杜氏数の分布地図

表６　農家１戸当たり経営耕地面積および田のある農家１戸当たり田面積（総農家）　（単位：a）

		1960年	1980年	2000年
都府県	経営耕地面積	77.2	82.3	94.7
	田面積		64.0	77.3
佐賀県	経営耕地面積	80.7	103.3	123.6
	田面積	68.2	79.9	104.8
肥前町	経営耕地面積	83.9	118.6	124.9
	田面積	**50.2**	65.3	70.4
晴気	経営耕地面積	84.9	76.9	**47.6**
	田面積	**39.9**	**49.5**	**41.3**
星賀	経営耕地面積	59.3	77.8	105.2
	田面積	**30.7**	**59.3**	63.0
納所	経営耕地面積	90.1	101.0	116.5
	田面積	**40.6**	**49.5**	**56.2**
入野	経営耕地面積	92.3	*131.2*	*129.7*
	田面積	**43.2**	**56.0**	**50.2**

資料：農業センサス、集落カード。
註：1960年の田のある農家１戸当たり田面積は、水稲収穫農家１戸当たり水稲収穫面積。
註２：ゴチック体は60a未満、ゴチック斜体は増加した注目数値（県平均を除く）。

かる。図からも想像されるが、晴気の総戸数は1970～2000年において50戸余であるから、軒並み杜氏が輩出されたと言うことができる。２番目に多いのは納所の23人だが、納所は肥前町内では面積最大の上場台地上の集落である。納所の2000年の総戸数は341戸、総農家数は189戸だから、集落内の杜氏数はまばらであり、晴気とは様子が異なる。次いで星賀が22人で３番目となるが、人数は納所とほとんど変わらず、納所が上場台地上の面積の広い畑作集落であり、杜氏密度

表７　酒造場別杜氏・蔵人一覧（1957年）

酒造場名	酒造場の所在地名	杜氏名	杜氏の出身集落名	肥前町出身の蔵人名				
西依酒造場	鳥栖市	中山守太郎	納所	井上福次	井上和夫	井上章光	井上元行	中山喜八郎
				中山雄市	中山英治	小崎 勇	古川博司	兼武勝喜
富安合資会社	福岡県久留米市	久留米杜氏		石田虎治	渡辺寅松	井上松一	岩本信一	前田政繁
				草場春雄	名古屋新八			
兼行酒造場	鳥栖市	岩本一雄	入野	中山後男	中山 清	中山幸男	渡辺 稔	江川育志
				山城正人	名古屋福芳	石田安清	井上寅義	大浦平八郎
				坂本 勝				
田中酒造場	伊万里市	中村弥太郎	晴気	坂本吉造	坂本政喜	坂本作治	坂本元次	坂本清作
				岩本哲郎	岩本晋太郎	岩本政治	藤田 明	
田尻酒造場	伊万里市	山口徳市	入野	井上義夫	井上義則	渡辺政人	中山村太	兼武八郎
中村酒造場	福岡県田川市	久留米杜氏		渡辺 一	渡辺嘉一郎	渡辺忠一	渡辺光好	渡辺清徳
				北原福寿				
大分酒類				草場勘治	石田政夫			
山内酒造場	唐津市	坂本豊造	晴気	井上恒夫	井上小三郎	井上辰巳	井上輝夫	井上義三郎
				岩本七郎	岩本輝雄	吉村留一	名古屋七治	
佐賀県酒造研究所	大和町	名古屋松太郎	星賀	石田 恵	石田 豊	北原初美	井上政生	名古屋宇吉
				渡辺次郎	中村弥太郎	前田荒吉	岩本藤造	
富士本酒造場	福岡県小倉市	井上久蔵	納所	井上春夫	井上 優	井上 清	井上正敏	井上敬治
				井上喬志	井上 幸	中山輝雄	渡辺日出夫	川原田三治
				鶴田正義				
藤生酒造場	唐津市	芥屋杜氏		井上忠光	井上儀隆	松尾 久	鶴田 強	中山虎之
小柳酒造場	小城町	渡辺長治	星賀	渡辺正清	渡辺県一	渡辺道之	渡辺幸一	渡辺亀利
				宗田林一	岩本廣司	吉村 勝		
此乃娘酒造場	福岡県	久留米杜氏		井上 堺	井上勝吉	井上新二	井上次男	井上八州馬
				井上明人	井上○○			
後藤酒造場	福岡県豊前市	久留米杜氏		井上 久	井上虎史	川本幾造	名古屋正八郎	
江崎酒造場	北茂安町	井上正樹	入野	井上孝夫	井上福治	井上孝光	井上幸哉	井上憲太郎
				松尾善行	松尾熊照	中山 孝	鶴田和邦	諸岡十吉
天山酒造場	小城町	唐津杜氏		坂本太輔	岩本太市			
斉藤酒造場	伊万里市	川本愛治	晴気	渡辺 学	渡辺清四郎	北原好造	北原 平	石田浩巳
財津酒造場	大分県大分市	渡辺忠平	星賀	渡辺政行	中山 進			
黒髪山酒造場	伊万里市	中山作造	納所	渡辺義清	渡辺太一郎	中山作元	井上常夫	北原儀一
前田酒造場	伊万里市	諸岡生治	田野	鶴田岩一	松尾喜市	坂本虎市	中野 清	宮崎勇夫
三国山酒造場（松隈酒造場）	基山町	北原福造	星賀	石田初次	石田清造	石田仁造	名古屋甚太郎	松尾三郎
				北原広司	渡辺増男			
白水酒造場	厳木町	岩本年太郎	晴気	坂本亀一	坂本健一	坂本秀雄	岩本徳蔵	
平田酒造場	福岡県朝倉町	渡辺忠治	星賀	渡辺輝男	渡辺昭二	渡辺隆広	前田秀吉	北原常治
				石田亀夫				
樋渡酒造場	伊万里市	岩本仁造	晴気	岩本 公	岩本張郎	岩本福一	諸岡喜一	大川内清
				中山萬治				
宮島酒造場	唐津市	岩本成男	晴気	岩本勇作	岩本宇作	岩本二男	岩本宗一	坂本二男
				坂本幸生	坂本成司	大浦真之	井上弥二郎	草場静男
重松酒造場	伊万里市	岩本平吉	晴気	井上松則	井上春利	井上唯義	井上久太郎	井上重平
牟田酒造場	伊万里市	坂本八造	晴気	井上依一	西村武司	宮崎義男	松尾今朝松	
森光酒造場	伊万里市	石田政吉	星賀	石田哲一	石田初太郎	北原国夫	諸岡勇助	渡辺直行
太洋潮酒造場	伊万里市	井上 諭	入野	井上鶴男	井上唯夫	井上末男	井上富士夫	大浦唯夫
				井上富男				
英彦山酒造場	福岡県田川市	久留米杜氏		前田定司				

資料：入野村酒造従業員名(記念碑、1957年建立）を基に聞き取りで補充。
註：○は不明。

がまばらであるのに対し、星賀は背後地に山林が迫るため耕地面積が狭小な臨海半農半漁集落であり、2000年の総戸数は298戸だが、総農家数は38戸だから、農家数の中では杜氏密度は高い。次いで４番目に多いのが入野の10人であるが、入野も納所と同様に比較的面積が広く、また立地条件も納所と類似しており、集落内での農家数における杜氏密度も納所と同じようにまばらである。

（2）杜氏輩出数の多い４集落の特徴

次に、杜氏を多く輩出した４つの集落の特徴を一瞥してみよう。表６にこれら４集落の耕地条件を示した。1960年の田のある農家１戸当たりの田面積がこれら４集落の農家の性格をよく示している。すなわち、県平均が68a、肥前町平均が50aであるのに対して、いずれの集落もそれが30～40a台と少なく、これらの集落の農家の大半が田について５反百姓にも満たない状況であったからである。

なお、1980年になり、上場台地上の畑作地帯に属する納所と入野において、田面積はせいぜい５反百姓に至った程度だが、畑地面積の増加によって、経営耕地面積が１haを超えるようになっている点が注目される。そして、この傾向は肥前町全体の傾向ともなってきている。その意味する事柄については、以下の杜氏の事例分析を通じて明らかにしたい。

（3）肥前杜氏集団の黄金時代の一端
――1957年の実態――

名古屋徳市杜氏の活躍を記念して1957年に頌徳碑が建立された際に、併せて当時の蔵人と勤務先酒造場名を入れた記念碑も設置された。表７は、頌徳碑と従業員碑に刻まれた杜氏名、蔵人名および酒造場名に所在地等を追加して整理したものである。表から読み取れる特徴を挙げてみよう。

まず、肥前杜氏数であるが、22人の杜氏名が確認される。

次いで、蔵人の数は187人を数える。全体では杜氏１人当たり蔵人数は平均6.2人である。うち肥前杜氏は22人で、その下の蔵人数は147人だから、肥前杜氏に限ると、杜氏1人当たり平均の蔵人数は6.7人となっている。

なお、名古屋徳一翁頌徳碑には1950年には肥前杜氏が23人、蔵人が250人いたとされているから、1950年には肥前杜氏１人に蔵人が平均10.9人いたことになる。このことは、1950～57年の７年間に、肥前町では杜氏数はほとんど変化がなかったのに対して、蔵人数は４分の１ほども減少したことを示している。当時はまだ高度経済成長が始まったばかりの時期であり、また酒造場数も清酒製造量も増加傾向にあった時期であり、さらに肥前町においては名古屋杜氏の活躍もあって肥前杜氏のメンバーが精力的に養成されていた時期でもあったため、杜氏数は維持されていたのに対して、他方で蔵人数がかなり減少したことには驚きを禁じ得ないが、少なくとも、蔵人数は早い時期から減少傾向を示していたことには注意しておかなければならない。

さて次に、肥前杜氏の勤務先であるが、唐津市へは３人、厳木町へは１人というように、地元への勤務はむしろ少なく、一番多いのは伊万里市への10人であり、次いで多いのは福岡県への６人と大分県への１人の計７人の県外へのルートであり、次いで多いのは鳥栖市・基山町・北茂安町等の佐賀平野東部方面への６人である。以上のような、県外よりは県内勤務が多いものの、唐津市などの地元への勤務はむしろ少なく、伊万里市や佐賀平野方面が多く、さらに福岡県を中心とした県外勤務も少なくなかったという、いわば肥前杜氏の基本形を確認することができる。

第２章　「肥前杜氏」のプロフィール

１．記述上の注意事項

・年次は酒造年度に合わせた。つまり2000年（度）とは2000年７月１日～2001年６月30日のことである。
・年次は生年には元号も使用したが、西暦年も付け、本文では基本的に西暦年を使用した。
・多くは、○年間とせず、○冬としたが、長期間の場合○冬というのはそぐわないため、○年間と表現した。
・酒造場＝蔵元、清酒製造＝酒造＝醸造と標記した。
・市町村名は、現在が合併して変更されていても、その当時の市町村名を使用し、必要に応じて

（　）内に合併町村名を付した。また佐賀県内の市町村名には佐賀県は付けずに市町村名だけとし、佐賀県外の市町村の場合には県名も付けた。

・記憶の不確かな年次、酒造場名、所在地について、複数の聞き取り対象者が同じ酒造場に勤務する事例や杜氏組合の資料によって確認あるいは修正した。

・杜氏の年齢は本報告刊行の2007年７月末現在の満年齢に統一した。

・なお、同じ年次でも満年齢に達しない場合は満年齢よりも１歳若い年齢表示をした。

・調査杜氏の経歴一覧（図４）の年次は杜氏・蔵人が酒造りを始める年次（酒造年度）を示している。

２．調査杜氏の概要

表８は以下に述べる調査杜氏の概要一覧である。また図３は調査杜氏の酒造り年表である。なお、叙述は、肥前杜氏発生のルーツと考えられる臨海棚田＝半農半漁集落である星賀・晴気から始め、その後に上場台地上の畑作地区の納所・入野という順序で、また同じ集落内では年齢順に、一方、現役杜氏については年齢順に並べている。

表８　調査杜氏一覧表

	叙述番号	氏名	年齢	出身集落名	蔵人年数	杜氏になった時の年齢	杜氏年数	酒造り年数	杜氏引退年齢	酒造りをした酒造場数	現在の自家農業
引退杜氏	①	名古屋徳市	享年58	星賀	14	31	26	40	57	9	
	②	渡辺正清	76	星賀	15	31	36	51	67	7	
	③	前田政繁	72	星賀	26	42	22	48	66	6	
	④	坂本大輔	84	晴気	16	34	25	41	61	9	稲作
	⑤	岩本太市	73	晴気	37	45	5	42	60	9	繁殖牛飼養
	⑥	井上久蔵	88	納所	21	39	33	54	72	6	稲作
	⑦	井上数男	81	納所	24	40	34	58	74	7	
	⑧	井上 堺	80	納所	27	38	32	59	75	6	葉タバコ作
	⑨	鶴田 強	76	納所	23	38	17	40	56	3	繁殖牛飼養
	⑩	井上弐彦	64	納所	9	26	19	28	45	3	イチゴ栽培
	⑪	山口徳市	82	入野	12	30	48	60	78	2	
	⑫	岩本一雄	81	入野	13	29	29	42	69	9	イチゴ栽培
	⑬	井上富男	79	入野	15	37	34	49	72	10	葉タバコ作
	⑭	大浦真之	79	入野	16	31	12	28	43	6	
	⑮	吉村留一	72	入野	16	34	3	19	37	5	葉タバコ作
	⑯	諸岡生治	83	田野	13	32	17	30	49	6	
現役杜氏	⑰	鶴田岩一	72	納所	25	44	28	53		5	イチゴ栽培
	⑱	岩本廣司	70	晴気	15	31	39	54		4	稲作
	⑲	坂本幸生	69	晴気	17	33	36	53		6	稲作
	⑳	井上 満	56	納所	20	35	21	41		8	

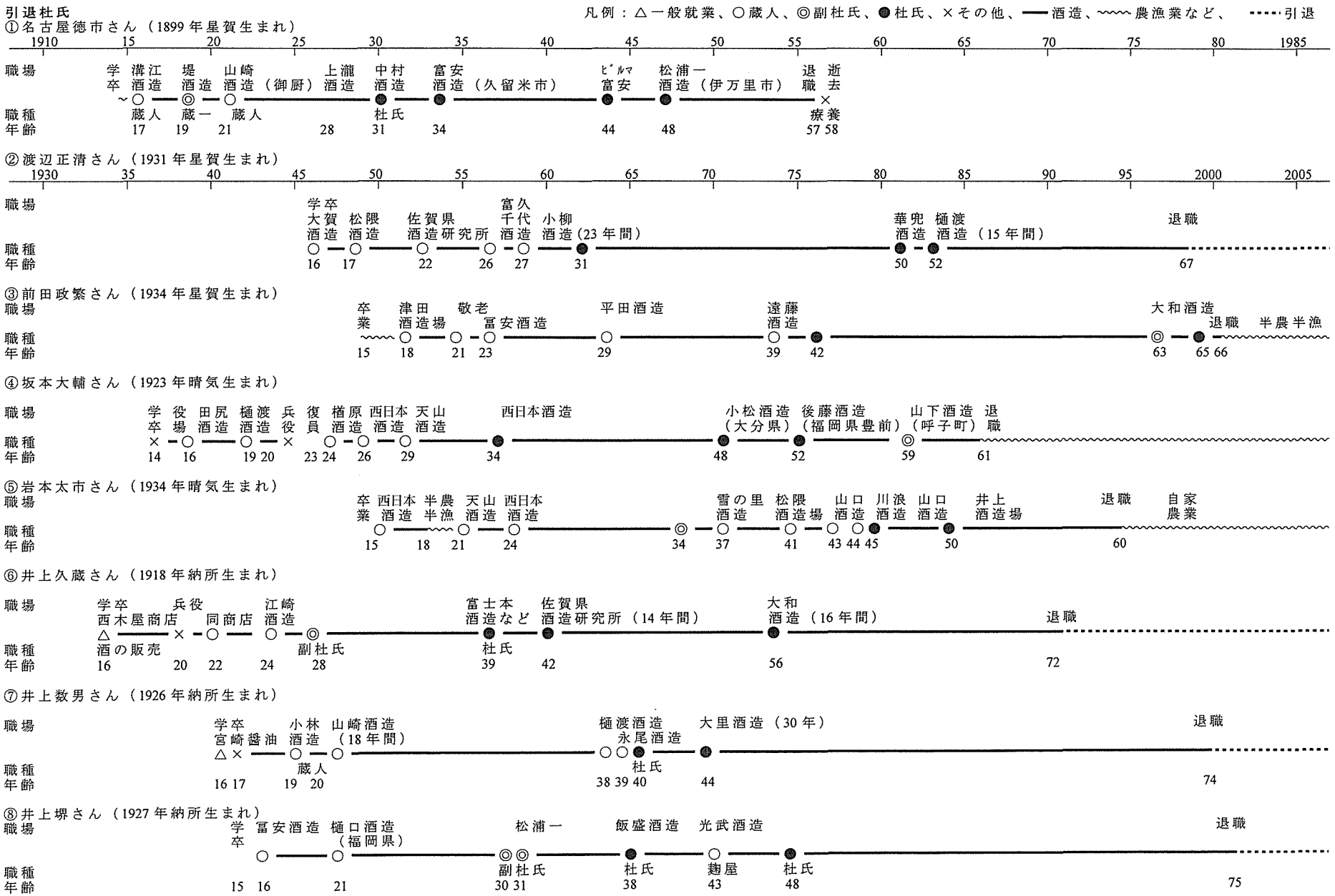


図4 調査杜氏の酒造り年表（1）

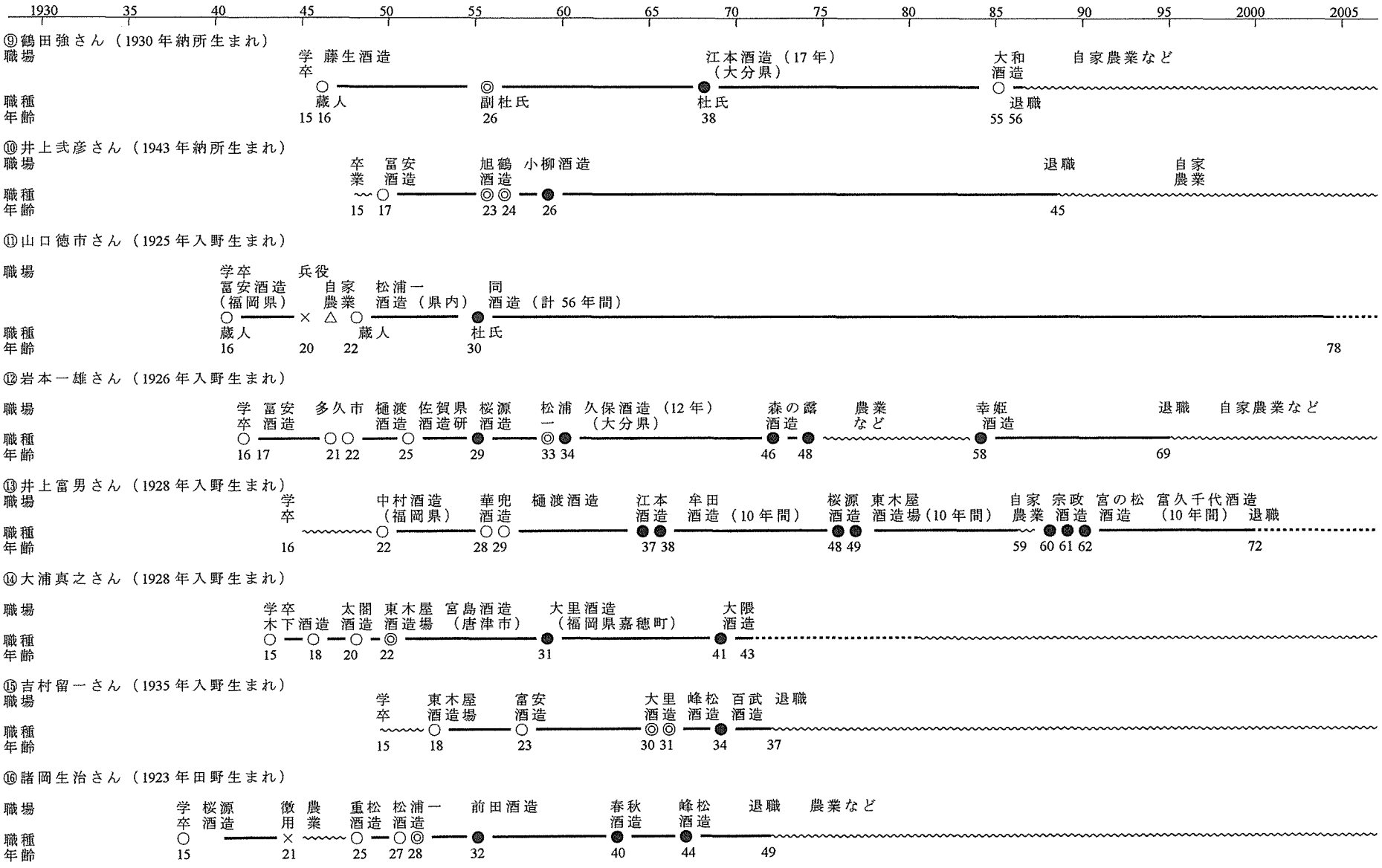


図4 調査杜氏の酒造り年表（2）

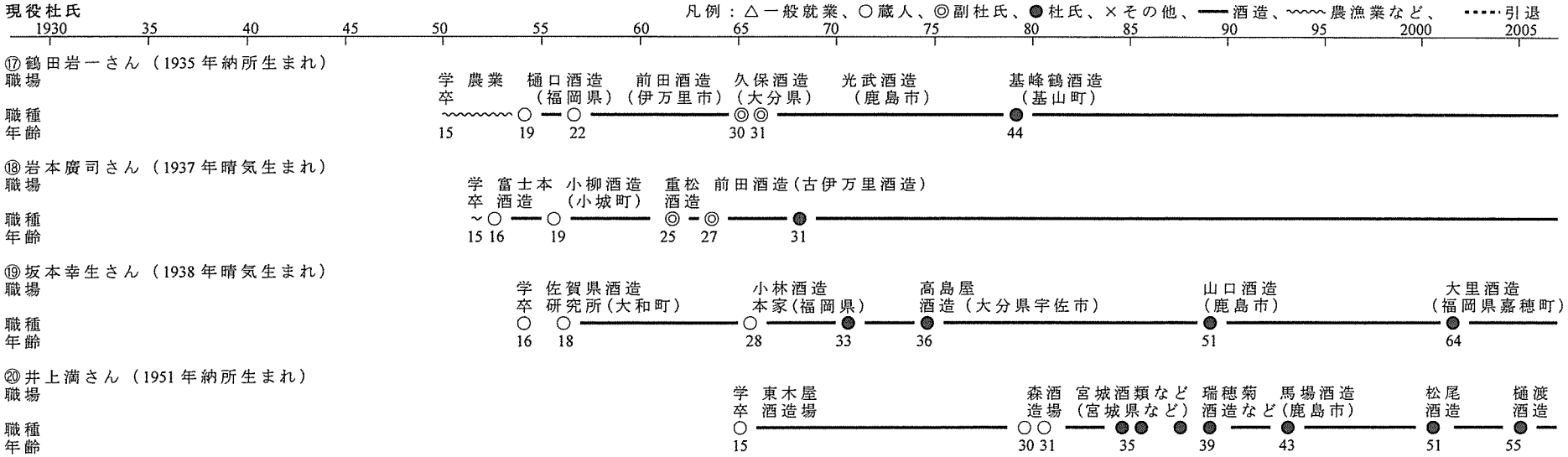
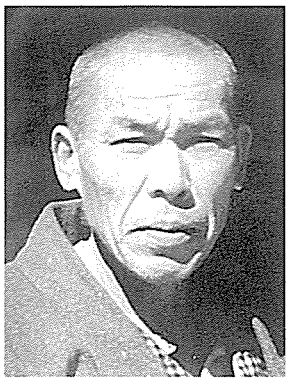


図4 調査杜氏の酒造り年表（3）

3．引退杜氏



①名古屋徳市さん
明治32(1899)年10月
星賀生まれ
昭和33(1958)年６月
逝去（満58歳）

出稼ぎでない、プロの杜氏の出現

名古屋さんは５人兄弟の末っ子だったが、養子先がイワシ漁網元だったため、高等小学校を卒業するとしばらくは自家の漁業の手伝いをしていた。その後、17歳になった大正５（1916）年の暮れに２つ隣町の浜玉町の溝上酒造場に蔵人として入ることになった。ここで２冬酒造りを経験する中で、名古屋さんは酒造りの仕事にすっかり魅了されていった。次いで大正７（1918）年には同町内の堤酒造場に蔵一として移り、ここでも２冬酒造りの仕事をした。次いで大正９年の暮れには今度は長崎県御厨村（現松浦市）の山崎酒造場に移り、麹屋として７冬酒造りの仕事を続けた。この間に名古屋さんはますます酒造りへ熱中していき、昭和２（1927）年には、酒造りの本場である福岡県久留米市の上瀧酒造場に研究生として入り、酒造りの技術習得に努めた。そして翌昭和３年に同市内の富安酒造合名会社に酛屋（もとや）として入社し、２冬酒造りに邁進した。そして、これまでの酒造りの手腕が認められて、ついに昭和５年に福岡県宗像郡上西郷村の中村酒造場に杜氏として行くことになった。そのとき名古屋さんは弱冠31歳であった。次いで昭和８年には、今度は杜氏として久留米市内の富安酒造に戻ることになった。このとき名古屋さんは家族ぐるみで富安酒造場の社宅に引っ越し、出稼ぎでなく、プロの杜氏となった。

第１回目の入野村酒造従業員組合を結成

こうして名古屋さんは、酒造りを一生の仕事にしようと決意して福岡県にやってきたわけだが、杜氏になってからは、自分の酒造りの技術を個人的に磨くだけでなく、ふるさとの肥前町の農漁家の中からより多くの杜氏・蔵人を養成することを目的に、富安酒造に戻った昭和８年に、入野村酒造従業員組合を結成した。

名古屋さんは、「面倒見がいい」、「先見の明がある」と言われる。この組合結成はその現れと思われる。すなわち、自分のふるさとである肥前町は冬期、農漁業の条件が厳しいため、酒造り出稼ぎをやることが有力な生計補充となることから、将来的により多くの地元民を杜氏・蔵人として養成することをめざしたのではないかと推測されるからである。それは、今日風に言うならば、名古屋さんが計画し実践した地域活性化戦略ではなかったかと思われる。

さて、名古屋さんは富安酒造に入って大活躍をし、酒造関係の名誉ある多くの賞を受けた。その結果、富安酒造はますます名声を博し、そこの杜氏である名古屋さんには九州各地から弟子入り志願者が殺到した。

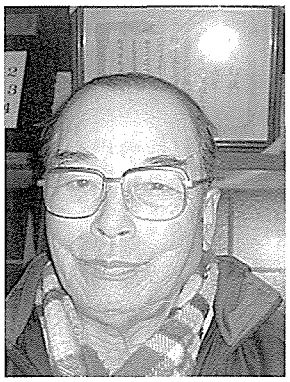
海外での清酒製造、入野村酒造従業員組合の結成と後進の育成

そうこうするうちに日本は第２次世界大戦に突入し、植民地や出兵先でも清酒の需要が高まり、そこでの清酒製造が要請され、名古屋さんに白羽の矢が立った。出兵先のビルマ（現ミャンマー）ラングーン（現ヤンゴン）に派遣され、その地で初の清酒製造を成功させた。しかし、３年後に帰国すると、富安酒造は企業整備（酒造中止）のために、家族ぐるみで帰郷し、漁業を再開し、その年の暮れには福岡県二日市市の大賀酒造に杜氏として出掛けたが、翌年からは伊万里市の松浦一酒造に移り、９冬杜氏を務めた。その間、1950年に再び入野村酒造従業員組合を設立し、改めて組合長役を務め、後進の育成に全力を投入した。

しかし、体調が芳しくないため、1956年に松浦一酒造を退職し療養していたが、その甲斐もなく、1958年６月に泉下の人となられた。享年58歳であった。

まさに、酒造りに生き甲斐を見いだし、全速力で駆け抜けた杜氏人生であった。

（巻末資料に掲載した頌徳碑碑文および生家での聞き取りを基に執筆）



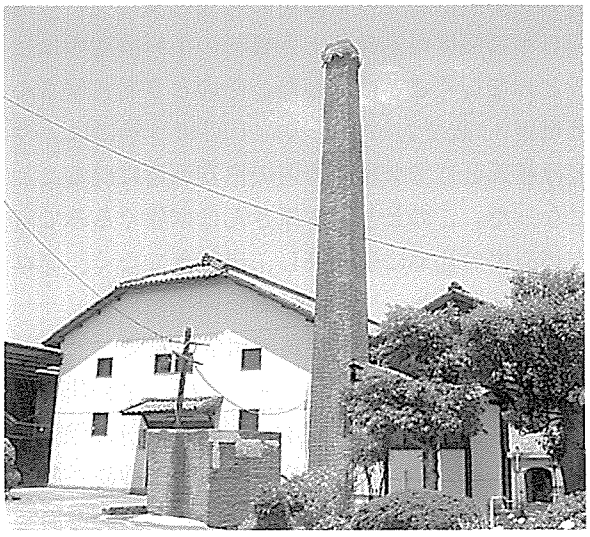
②渡辺正清さん
昭和６(1931)年２月
星賀生まれ
76歳

親子２代の杜氏

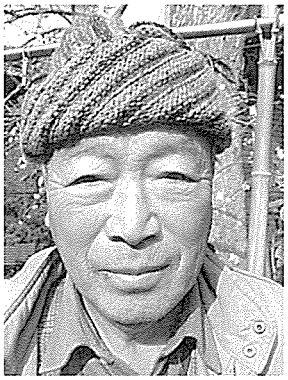
正清さんが子供のころ家には田が３～４a、畑が40aほどあったが、農業だけでは生活が成り立たず、また当町では多くの者が町外の酒造場に出稼ぎに出ており、父親も杜氏をしていたため、そのような雰囲気の中で、入野尋常高等小学校を卒業して、まず集落（星賀）出身の杜氏を頼って福岡県二日市町の大賀酒造に蔵人として入り、１冬酒造りを経験した。しかし翌年の暮れには、その杜氏が伊万里市の酒造場に移ったため、正清さんは今度も集落（星賀）出身の別の杜氏（北原福造さん）を頼って佐賀県基山町の松隈酒造場に蔵人として移った。松隈酒造場には、肥前町から７～８名、地元の基山町から１～２名、そして福岡県から２～３名の蔵人が働いていた。正清さんはそこで５冬、蔵人として働いたが、翌1953年には、やはり星賀出身の杜氏の名古屋松太郎さんを頼って、その年に発足した佐賀県酒造研究所に移った。そこには星賀から２～３名、星賀以外の肥前町内から10名ほどの蔵人が来ていた。正清さんはそこで蔵人として４冬働いた。次いで、1957年には父親が杜氏を努めていた鹿島市の富久千代酒造で蔵人として１冬シーズン働いた。そこの蔵人は星賀の人３名、星賀以外の肥前町の人１名、地元の鹿島市の人８名の計12名で構成されていた。翌1958年、杜氏の父が小城町の小柳酒造に移ったため、杜氏の移動に付いて正清さんも小柳酒造に移り、そこで３冬、蔵人として働いたが、父親が病気で杜氏を辞めたため、61年から正清さんが父親に代わって杜氏を努めることになった。そのとき正清さんは31歳であった。小柳酒造で父親が杜氏を努めていたときには蔵人は肥前町出身者12名であったが、正清さんが杜氏になってからは蔵人は９名に減った。その後、こうして正清さんは小柳酒造で23年間杜氏を努めることになり、この酒造場はこれまででは最も長い職場となった。しかし、1981年に小柳酒造は自社製造を止め委託製造に切り替えたため、やむなく正清さんは伊万里市の華兜酒造に移った。正清さんはそこで２冬、肥前町出身の４～５名と鎮西町出身の２名の蔵人とともに酒を醸した。そして1983年には伊万里市内の樋渡酒造場に移り、その後この酒造場で15年間杜氏を努め、1998年に67歳でこの酒造場を退職し、杜氏人生にピリオドを打つこととなった。樋渡酒造場では肥前町出身の蔵人が６～７名いた。

振り返ると、蔵人15年、杜氏36年、計51年間酒造りをしてきたことになる。山口徳市さん（②）同様、半世紀を超える酒造り人生ということになる。その間に、樋渡酒造場で杜氏を努めていた50歳半ばの時期に、正清さんも肥前杜氏組合長を４年間努めている。

父親も杜氏をやっていたこともあって、自家農業はもともと小さかったし、正清さんも年を取ってきたため、10年ほど前に田と畑の大半を売却し、今では残った畑１反ほどで自家用野菜を栽培する程度である。



（かつて正清さん親子が長く杜氏を務めた蔵、2007年６月）



③前田政繁さん
昭和９(1934)年12月
星賀生まれ
72歳

主に福岡県内で酒造り

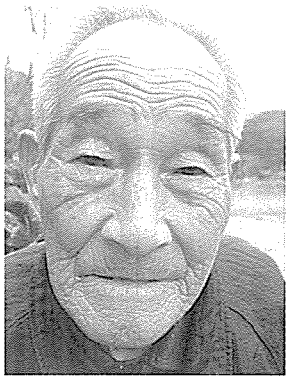
星賀集落は半農半漁が多かった。政繁さんが1949年に肥前中学校を卒業したとき、両親は田60a、畑50aで米麦・甘藷を栽培していたが、２～３年は家のこの農業と漁業（鯛の一本釣りなど）の手伝いをした。しかし、農業の規模も小さく、漁業も冬は海が荒れて出漁日が限られるため、現金収入を求めて、星賀出身の杜氏の渡辺忠治さんを頼って、基山町の津田酒造場（太田山）に蔵人として出かけることにした。この蔵には肥前町出身の蔵人が政繁さんを含めて６人は働いていた。この蔵で政繁さんは３冬、住み込みで酒造りをしたが、経営不振によって蔵が閉鎖されたため、その年の暮れには渡辺杜氏の知り合いの「久留米杜氏」を頼って渡辺さんともども福岡県善導寺町の敬老酒造（敬老）に蔵人として移った。そこの蔵では、政繁さんらが入った時は「ひじまい」であったため、蔵人は肥前町から３人と地元・久留米周辺から９～10人の計12～13人いたが、入って３冬目からは「かたしまい」となり蔵人を減らしたため、政繁さんも渡辺さんも別の「久留米杜氏」を頼って久留米市の冨安酒造に移った。この蔵はかつて名古屋徳市さんが杜氏を務めていた名のある中堅蔵であり、当時は名古屋さんの後任に「久留米杜氏」が来ていたが、蔵人として肥前町からの５人以外に地元・久留米市周辺から29人、計34人の勢力を保持していた。政繁さんは冨安酒造で、６冬働き、最後の冬は麹屋の手伝いをやったため、次の年の冬には麹屋（麹造りの責任者）として誘われ福岡県朝倉町の平田酒造（千代の花）に移った。平田酒造の杜氏は「柳川杜氏」であったため、この蔵の蔵人は肥前町からも３人来ていたが、柳川からは８人来ていた。政繁さんは２冬、柳川杜氏の下で麹屋を努めたが、３冬目に柳川杜氏が辞めたため渡辺忠治さんが杜氏となり、政繁さんは麹屋から蔵一に昇進した。そして政繁さんは蔵一として６冬酒造りに当たった。６冬作った1973年、５社が合併し遠藤酒造（甘木市）となったが、ここの杜氏は渡辺さんが努めたため、政繁さんはこれまで同様、渡辺杜氏の下で蔵一となり、この蔵一の役を３冬努めたときに渡辺杜氏が高齢のため杜氏を引退したので、遠藤酒造に入って４冬目から、いよいよ政繁さんが杜氏となり、それ以降21年間の長きにわたって政繁さんが遠藤酒造の杜氏を努めあげた。

女性の方が多い蔵の出現

遠藤酒造で政繁さんが蔵一を努めていたころ蔵人としては肥前町からは４人が住み込みで行っていたが、地元の甘木市からは中高年者を中心としたパートの女性蔵人が10人通いで来ていた。引き続き政繁さんが杜氏となってからも、蔵人は肥前町出身者１人と地元男性１人以外は地元出身の女性パートが10人と圧倒的に多かった。なお女性蔵人の仕事内容は男性蔵人と同じであった。つまり、遠藤酒造は人数的に女性の方が多い蔵だったのである。

その後、大和町の大和酒造で蔵一と杜氏を１冬ずつやって2000年に66歳で酒造りからは引退した。

以上が政繁さんの酒造り人生の略歴だが、政繁さんは酒造りのみでなく農業と漁業（鯛の一本釣りなど）も行ってきたし、奥さんは郵便局勤務だったので、世帯としては多就業でやってきた。そしてこの間、田畑の所有面積を多少拡大してきたし、４トン級の動力船も入手したが、農漁業での自立は困難と考え、同居の息子さん夫婦（47歳、44歳）は農漁業には携わらず、田畑は目下政繁さん夫婦が30aの米と５aの野菜を作る以外は貸し付けており、政繁さんは今でも時々船で漁に出るという。酒造りについては、若かった時は朝早い仕事できついという思いが強かったが、麹屋、杜氏となるにつれ、出来栄えを見る喜びや楽しみが感じられるようになってきたと振り返る。



④坂本大輔さん

大正12(1923)年５月
晴気生まれ
84歳

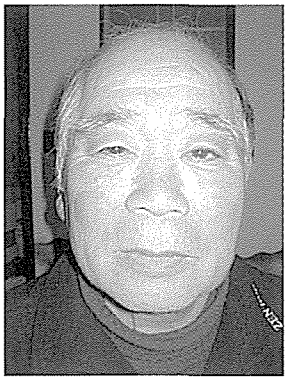
父親も蔵人、そして半農半漁

大輔さんが子供のころは、実家は、田畑それぞれ40～50aを耕すと同時に、タコ壺やイワシきんちゃく網漁を行う半農半漁世帯であった。また父親は冬場に蔵人として酒造り出稼ぎに出ていた。大輔さんは14歳で入野尋常高等小学校を卒業するとすぐに入野村役場に採用され、２年半雑用係を努めたころ、同じ集落（晴気）出身の杜氏の岩本龍吉さんに誘われたため、役場を辞めて、その年の暮れから伊万里市の田尻酒造場に出かけることにした。そこで１冬蔵人を努めて翌年春に家に戻ると、今度は徴兵検査が待っており、まずは久留米48連隊、次いで中国東北部（満州）、台湾と回り、２年半の兵役を終え1946年に復員した。大輔さんは次男であったが、長男が戦死したため、坂本家のあとつぎとなり、その後、１年ほど家で農漁業に就いていたが、1947年暮れから父親ともども蔵人としてまた酒造り出稼ぎに出かけることとなった。大輔さんは福岡県善導寺町の楢原酒造に出かけたが、父親は別の蔵元に入った。大輔さんは楢原酒造で２冬酒造りをした。その後は、北茂安町の西日本酒造に移り、そこで３冬蔵人として働いた。その最後の年に杜氏になるように推薦されたが、まだ20歳代であったし、杜氏になるにはもう少し「人使い」の経験を踏む必要があると考え、翌1952年に天山酒造に移り、杜氏の見習いのつもりでそこで５冬さらに蔵人を勤め、そしていよいよ1957年に以前蔵人として働いていたことのある西日本酒造に今度は杜氏として戻る格好となった。そのとき大輔さんは弱冠34歳であった。そこで14年間杜氏を努めることとなったが、そのとき蔵人として、地元の晴気や納所の出身者を13～14人集めた。この中には次に述べる岩本太市さんも含まれていた。しかし、西日本酒造は上述のように1971年に閉鎖されたため、大輔さんはその年の暮れは大分県院内町の小松酒造場に杜氏として出かけた。ここでの蔵人は地元出身者が８～９人と長男の計９～10人であった。しかし、安心院町の職場は、行き帰りにそれぞれ10時間を要し大変であったため、ここは４冬で辞めることとした。そこで次には福岡県豊前市の後藤酒造に杜氏として行くことにした。蔵人としては肥前町から６人、地元から１人調達した。この蔵では７冬酒造りをした。そして、その後は、鎮西町出身の杜氏に頼まれて蔵一（副杜氏）として呼子町の山下酒造に移った。山下酒造には蔵人としては鎮西町からの４人と大輔さん親子の計６人がいた。大輔さんは山下酒造で蔵人として４冬働いたが、その間に還暦を超えることとなったため、これを機に酒造り人生から引退することとした。

水田を徐々に拡大

その後はもっぱら自家農業に就くこととなったが、これまでの酒造り出稼ぎとイワシきんちゃく網漁で得た収入を元手に田を30aほど購入し、現在は米作を70aほど行っている。ただ現在は、大輔さんは農業からも引退したため、米作りは奥さん（74歳）と息子さん（45歳）の２人で行っている。

大輔さんの酒造り人生は、兵役を挟んで、蔵人として16年、杜氏として18年、計34年にわたる。また、通算９カ所の酒造場を渡り歩いたことも特徴的である。このような決して楽ではなかったと想像される酒造り人生を振り返って、大輔さんは、34歳で杜氏になったときに給与が倍増したこと、まだ機械化されていなかった当時の米洗い作業はつらかったが誰にも負けない技術を身に付け自負していたことなどを感慨深く思い出すという。また、杜氏を努めた西日本酒造の時代に神戸・灘の大関（株）に２週間ほど研修に行って猛勉強したことも忘れがたい思い出となっていると語る。



⑤岩本太市さん
昭和９(1934)年４月
晴気生まれ
73歳

半農半漁、親子２代の杜氏

太市さんの家では父親が杜氏をしていたため、太市さんの職業選択は宿命的に決められていたと言ってもよい。親子２世代の杜氏というタイプである（②の渡辺正清さんも同タイプ）。

15歳で肥前中学校を卒業したその春に、父親が杜氏をしていた北茂安町の岡村酒造に蔵人として入り、初めて酒造りの経験をした。友人の蔵人は全て肥前町出身者で、晴気集落から４～５人来ていたが、納所集落からも１～２人来ていた。ここで蔵人を３冬務めた時に、父親が酒造りの仕事から引退したので、太市さんもとりあえず岡村酒造を辞めた。

その後３年ほど、太市さんは両親と共に自家の農業（田60a、畑60a）と漁業（イワシきんちゃく網）をしていた。

福岡県の蔵には女性も入る

そんな折り、２つ隣の町（鎮西町）出身の杜氏（「唐津杜氏」）の山下さんから誘われて小城町の天山酒造に蔵人として入ることになり、ここで３冬酒造りの仕事をした。天山酒造では杜氏の出身地である鎮西町出身の蔵人が13人いたが、肥前町出身者も２～３人いて、その１人が同じ集落（晴気）の坂本大輔さん（④）であり、太市さんが天山酒造で２冬酒造りをした年の暮れに坂本さんは杜氏として岡村酒造に移ったが、坂本さんはかつて岡村酒造で蔵人時代にそこの杜氏であった太市さんの父親に世話になった関係もあり、翌58年の暮れに太市さんを岡村酒造に引き抜いた。

こうして太市さんはまた岡村酒造に戻ってきた格好となった。太市さんは、戻った岡村酒造で初めの10冬は麹屋を務めたが、その後の３冬は蔵一（副杜氏）に抜擢された。しかし、岡村酒造は経営不振等を理由に71年に閉鎖されることとなったため、太市さんはやむなく71年から福岡県甘木市の雪の里酒造に蔵人として移った。ここの杜氏および蔵人の出身地は多様であり、杜氏は柳川杜氏で、蔵人は肥前町から４人、鹿島市から２～３人、福岡県八女市から２人、そして精米所に長崎県小値賀島から３～４人が来ていた。太市さんは雪の里酒造では４冬働いたが、その後75年からは基山町の松隈酒造場に移った。そこの杜氏は久留米杜氏で、蔵人は久留米市から７～８人、肥前町から２～３人が来ていたが、経営不振のため生産量を縮小せざるを得なかったため、太市さんはここに２冬いて、その後は福岡県北野町の山口酒造場に蔵人として移った。しかし、ここでは酒造り以外の仕事もしなければならなかったため、１冬で辞め、翌年の暮れには隣集落（星賀）出身の知り合いの杜氏の宗田林一さんを頼って伊万里市の川浪酒造に蔵人（酝屋：もとや）として移った。ところが、１昨年まで働いていた北野町の山口酒造場が今度は杜氏として受け入れると言うので、川浪酒造を１冬で辞め、山口酒造場に戻る格好となった。山口酒造場で太市さんは肥前町から４人の蔵人を手配し、また地元からも２人が来ていた。ここで太市さんは５冬杜氏を務めた。そして50歳になったので、家に戻って農漁業に専念しようと考えていたが、友人を通じて同じ町内の井上酒造場に杜氏の補佐として来るように懇願されたため、それを引き受けた。井上酒造場では肥前町から３人、小値賀島から１人、地元から３人の蔵人が来ていたが、それでも人手不足のため地元の女性２人も蔵に入れた。そして結局ここで10年間杜氏の補佐を務め、還暦の年に退職した。

酒造りと漁業（イワシきんちゃく網漁）を元手に農業の規模拡大

その後は酒造りとその間の漁業（イワシきんちゃく網漁）で得た収入を元手にして田１haと畑150aを購入し、また繁殖母牛を増頭し、現在は奥さん（70歳）と２人で稲１ha、飼料作畑２haと繁殖母牛16頭の専業農家となっている。目下、子牛の価格が良く畜産経営は順調だが、人手不足のため、牛の頭数を減らさざるを得ないのが悩みの種と語る。

⑥井上久蔵さん

大正７(1918)年10月
納所生まれ
88歳

調査者の中で最年長

久蔵さんは男２人、女３人の長男。16歳で地元の納所尋常高等小学校を卒業したとき、家では両親が田70aで米麦、畑40aで麦40a、葉タバコ20a、サツマイモ20aを作っていた。卒業年の1934年、日本はまだ昭和恐慌下にあり、不景気の時代で、現金収入の道は多くなかった。そのような時代背景のもとで、当時、肥前町から隣町の唐津市の西木屋商店（清酒・醤油製造販売）に勤める人が６人くらいおり、その中に知り合いの番頭さんがいた関係で、その番頭さんに誘われて、久蔵さんは学卒と同時にこの西木屋商店に勤めることとなった。本商店で久蔵さんは酒・醤油の販売の仕事をした。

1937年に日中戦争が始まったため、20歳になった1938年に徴兵され、39年には中国大陸に出向いたが、翌40年には復員し、まだ戦時中ではあったが、西木屋商店に復帰し、引き続き酒・醤油の販売の仕事を担当した。長男であり、自家の農業も手伝う必要があったため、翌41年からは製造部に移り蔵子として一冬清酒製造を経験した。そして翌42年から北茂安町の江崎酒造場に写り、初めの４冬は蔵子として働いたが、５冬目には28歳で副杜氏に抜擢された。その副杜氏を10年余り経験する中で、杜氏としての技術や采配力を身につけ、56年に福岡県小倉市にある富士本第三酒造場にいよいよ杜氏として移ることになった。そのとき久蔵さんは39歳であった。本酒造場で杜氏を１年努めたが、翌年には伊万里市の前田酒造場に移り、前田酒造場では杜氏を２年努め、そしてまたその翌年の60年には佐賀県酒造研究所に移った。本研究所では杜氏を14年間努めた。その後は大和町の大和酒造に移り、ここで杜氏を16年間努め、72歳で本酒造を退職し、杜氏生活に終止符を打つこととなった。

こうして、振り返ると、蔵子として５冬、副杜氏として11冬、杜氏として33冬、年齢でいうと23歳の時から72歳まで全部で49冬酒造りの仕事をしてきたことになる。そして、佐賀県酒造研究所の杜氏をしていたときに、肥前杜氏組合長（兼・九州酒造杜氏組合副組合長）を８年間務めた。また、同研究所に入って数年後に、配下の蔵人を鹿島市の光武酒造に杜氏として出し、その数年後にも同様に鹿島市の小柳酒造に杜氏を出し、２名の杜氏を養成した。

一方、自家の農業のほうは、田70aは維持してきたが、畑の半分ほどは遠方にあり不便であるため、耕作放棄・原野化したが、自宅付近の半分ほどの20aは現在自家用野菜栽培に充てている。杜氏生活に集中してきたため、自家農業、特に畑作は縮小せざるを得なかった。自家農業縮小のもう１つの要因は、あとつぎの息子さん（57歳）が役場職員、お嫁さん（54歳）が町立保育所勤めであり、農業を必要条件としなくなったからでもある。

なお、久蔵さんは33年間の長い酒造り人生を振り返って、1974年に杜氏として入った大和酒造では、入った当時、県下最大の清酒製造量を誇り、他の酒造場にはない大型機械をいち早く導入していたため、神戸・灘の大関酒造（株）の本社に一週間研修に行って技術習得したときの苦労が一番の思い出であったと語る。また、この蔵元での酒づくり期間が最も長かったことも影響して、この蔵元において肥前杜氏集団名を付した銘柄や久蔵さんの名前を使用した銘柄を製造したことも忘れ難い思い出となっている。さらには、76年には酒造１級技能士資格を取得できたし、87年にはこれまで杜氏として長年酒造り業界に貢献したことに対し福岡国税局長から杜氏32年感謝状を受け、いまは穏やかな毎日を送っている。

（かつて久蔵さんが杜氏をしていた酒蔵、2007年６月）

⑦井上数男さん

大正15(1926)年１月
納所生まれ
81歳

父親は桶造り職人

数男さんが16歳で納所尋常高等小学校を卒業した1942年、自家の田も畑もそれぞれ25a程度しかなく、父親は主に桶作りの仕事としていた。そこで数男さんは、その年に父親の姉が勤めていた隣町（唐津市）の宮崎醤油に働きに出た。仕事内容は醤油の製造・販売であった。宮崎醤油で働き始めて１年ほどしたときに徴用を受け、長崎県香焼町の造船所に行き１年ほど働いていたが、身体をこわしたため、徴用を免除され実家に戻ってきていたときに、ちょうど終戦となった。

その後まもなく、福岡県宇美町の小林酒造本店（銘柄：萬代）に蔵人として出ていた近所の親戚から誘われて、数男さんも一緒に小林酒造本店で蔵人として１冬酒造りを経験することになった。小林酒造本店の杜氏は福岡の人だったが、10人ほどの蔵人の半数は肥前町出身者だった。その翌冬は父親の知り合いの集落（納所）内の杜氏（井上熊一郎さん）からの誘いで長崎県御厨町（現松浦市）の山崎酒造場に出かけることになり、山崎酒造場にはその後結局18冬行くことになった。山崎酒造場では肥前杜氏（熊一郎さん）の下に数男さんを含めて肥前町出身の蔵人が５～６人働いていた。

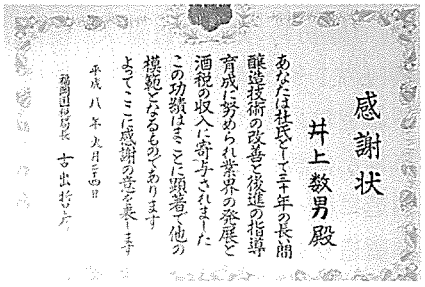
「出稼ぎのむら」＝肥前町

1964年に東京オリンピックが開催されたが、その直前の数年間は、冬は山崎酒造場に出かけ、また夏には東京に土木作業の出稼ぎに出かけた。こうして、肥前町は実に多くの出稼ぎ者を輩出したことが分かる。当時はまさに「出稼ぎの村」であったと言っても過言ではない。

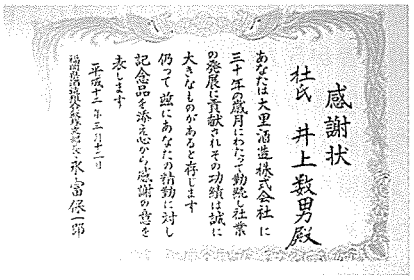
その次には、今度は隣の集落（入野）の杜氏（井上諭さん）に誘われて伊万里市の樋渡酒造場に蔵人として１冬入ったが、そのときの友人の蔵人（中山輝雄さん）がその翌年の冬に鹿島市の永尾酒造の杜氏に出たため、数男さんも中山杜氏に付いて永尾酒造に移った。そして、次の年の冬には数男さんは中山さんに代わって永尾酒造の杜氏となることになった。そのとき数男さんはちょうど40歳になっていた。その後、数男さんは永尾酒造で杜氏を４冬務めた。

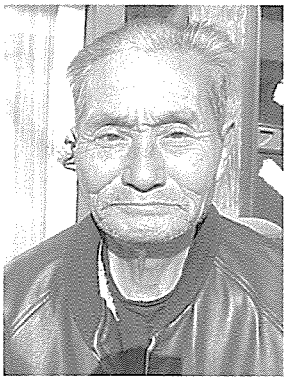
それから、数男さんは福岡県嘉穂町の大里酒造に杜氏として移り、この蔵で30年間酒造りに当たった。そのとき大里酒造には蔵人が５～６人いたが、すべて肥前町納所出身者で占められていた。そして、数男さんは、2000年春に74歳で大里酒造を退職し、杜氏人生から引退することとなった。

こうして、数男さんは蔵人として21年、杜氏として34年、計55年の長きにわたって酒造り人生を歩んできたことになる。この酒造り人生を振り返って、最も長く務めた大里酒造の杜氏の時に吟醸酒を造って２～３度全国新酒鑑評会で入賞したことがやはり一番印象に残っていると語る。


感謝状
井上数男殿
あなたは杜氏として三十年の長い間
醸造技術の改善と後進の指導
育成に努められ業界の発展と
酒税の収入に寄与されました
この功績はまことに顕著で他の
模範となるものであります
よってここに感謝の意を表します
平成八年九月三日
福岡国税局長　古出哲也

（多くの表彰状をいただいている）


感謝状
杜氏　井上数男殿
あなたは大里酒造株式会社に
三十年の歳月にわたって勤務し社業
の発展に貢献されその功績は誠に
大きなものがあると存します
仍って茲にあなたの精勤に対し
記念品を添え心から感謝の意を
表します
平成十二年三月十二日
福岡県酒類卸売業組合長　永富保一郎



⑧井上堺さん
昭和２(1927)年５月
生まれ
80歳

父親も蔵人経験者

15歳で納所尋常高等小学校を卒業し、翌年の冬に先輩の蔵人に誘われて福岡県久留米市の富安酒造に蔵人として入った。富安酒造は中堅の酒造会社で複数の蔵を経営しており、そのうちの１つの蔵の杜氏が肥前杜氏の名古屋徳市さんであったが、堺さんが入った蔵はこの蔵とは別の蔵で、そこでは久留米杜氏の下で30人ほどの蔵人が働いていた。蔵人数を出身地別に見ると、最も多かったのは長崎県の小値賀島から12～13人、次いで肥前町から10人、そして地元出身者が５～６人であった。堺さんは富安酒造で５冬働いたが、その後は福岡県大刀洗町の樋口酒造に蔵人として移った。樋口酒造では初めの10冬は蔵人（麹屋）を務めたが、最後の１冬は蔵一（副杜氏）を務めた。そして、その翌年の冬は後述⑪の入野集落の杜氏の山口徳市さんに誘われて、蔵一として伊万里市の松浦一酒造に移った。ここでも堺さんは蔵一を務め、７冬酒造りを行った。そして、ついに1965年に鹿島市の飯盛酒造に杜氏として赴任した。そのとき堺さんは38歳であった。飯盛酒造では蔵人は肥前町から２人連れて行ったが、地元出身者が５人いた。

次に移った同市内の光武酒造では、初めの５冬は同郷の肥前杜氏の井上八州馬さんの下で堺さんは麹屋を務めたが、井上八州馬さんに不幸があったため、翌冬から堺さんが杜氏となり、その後27年間の長きにわたって、堺さんは光武酒造で杜氏を務めることとなり、2005年春に75歳で最終的に光武酒造を退職することになった。光武酒造で杜氏を務めていたときの蔵人は、肥前町からと地元からそれぞれ３人ずつ計６人であった。

こうして、堺さんは蔵人として27年間、杜氏として32年間、計59年間の長きにわたって酒造り人生を歩んだことになる。

杜氏出稼ぎと葉たばこ栽培で農業の規模拡大を果たす

堺さんは、杜氏人生を振り返って、毎年毎年全力を投入して酒造りを行ってきたと語る。また、堺さんは自家の農業の規模拡大による自立化が酒造り出稼ぎの目的だったという。そして事実、堺さんが学校を終え酒造り出稼ぎに出た当時は、自家の田は50aほど、畑は60aほどしかなく、米、麦、菜種、馬鈴薯を作っていた程度で、そのため父も蔵人として出稼ぎに行かざるを得ない状況だったが、その後、堺さんによる長期の酒造り出稼ぎでの収入を元手に、また1960年代頃から始めた葉タバコ栽培からの収入増加も元手にして、田畑を徐々に購入して拡大してきた。そして現在では、田が200a（所有地）、畑が150a（うち借地が25a）となり、それぞれで米200aと葉タバコ150aを栽培しており、本人、妻（76歳）、後継者（59歳）、その妻（59歳）、さらには孫（30歳）の５人による専業農家となっている。こちらも実に長い道のりであったと言える。

（初夏の葉タバコ、肥前町、2007年６月）

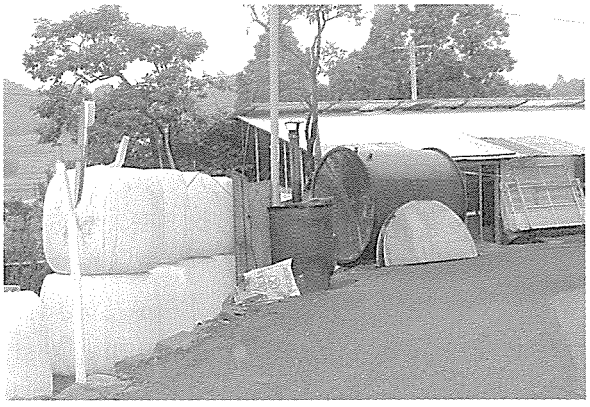
⑨鶴田 強さん
昭和５(1930)年９月
納所生まれ
76歳

強さんは終戦の年（1945年）に15歳で納所尋常高等小学校を卒業した。長男であったため、家にいなければならなかったが、冬の仕事としては酒造り出稼ぎ以外には適当な農外就業がなかったため、蔵人をしていた近所の先輩に誘われて隣町（唐津市）の藤生酒造に蔵人として出かけることになった。藤生酒造では小金丸さんという福岡県志摩町芥屋出身者（芥屋杜氏）の下に芥屋から３～４人、肥前町から６～７人、計10人前後の蔵人が働いていた。この蔵で強さんは初めの10冬は釜屋（かまや）として働き、その後の12冬は蔵一（くらいち：副杜氏）を努めた。その後1968年に38歳で杜氏として大分県宇佐市の江本酒造に入り、ここで17年間杜氏を務めた。江本酒造では当初は肥前町から６人の蔵人を集めたが、途中で３社合併により蔵が大きくなったため、それ以降は蔵人を11人に増やした。もちろん11人全て肥前町出身者であった。その後1985年に県内の大和酒造に蔵人（麹屋）として移り、当初はしばらくここで酒造りを続けるつもりでいたが、地元の納所西区（旧村）の区長を勧められたため、大和酒造での酒造りは１冬のみで止め、翌年春には退社せざるをえなかった。この蔵では同郷（納所）の上述⑥の井上久蔵さんが杜氏を務めており、蔵人としては肥前町出身者が６人、地元出身者が６人働いていた。ここを退職して強さんは２年間区長を務めた。

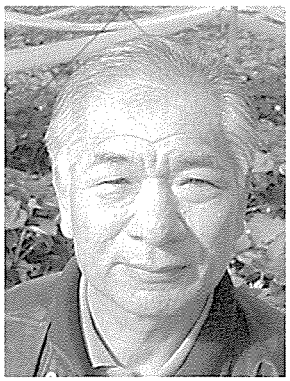
こうして強さんは、蔵人として23年間、杜氏として17年間、計40年間の長きにわたって酒造り出稼ぎをしてきたことになる。強さんは、これまでの酒造り人生を振り返って、杜氏は蔵元の財産を預かり、その動向を決定づけるほど責任の重い仕事であるので、難しいし、苦労の多い職種だと語る。また、蔵人と杜氏の和合がうまくいかないと良い酒もできないと言う。こうして、なんといっても人間関係が大事だし、それがまた苦労の種でもあると言う。そのため、良い酒ができて、品評会で入賞したときなどは関係者一同喜んだものだと語る。

さて、強さんは酒造り出稼ぎで得た収入は主に子弟の教育費に使ったが、併せて可能なかぎり農業の規模拡大にも利用してきたと言う。学卒時には父母が田40a、畑60aで米、裸麦、葉たばこ、野菜等を栽培していたが、強さんが農業を受け継いでからは酒造りから得た収入を元手に田を20a購入し、併せて田を20a借地し、現在では米を80aほど栽培している。また、酒造会社退職後には繁殖母牛を10頭に増やし、さらに畑を50a借地して飼料用作物を１haほど栽培するようになった。

しかし、このような農業をもっぱら担っているのは強さんと奥さん（73歳）の２人であり、跡継ぎ（52歳）と嫁（47歳）は休みの時に加勢してくれる程度であるため、繁殖牛をこれ以上増やすのは困難という。



（鶴田さんの牛舎と飼料用稲わらロール、2007年６月）



⑩井上弐彦さん
昭和18(1943)年１月
納所生まれ
64歳

最年少杜氏の誕生

弐彦さんは、今回調査した引退杜氏の中では最も若いことと、また杜氏になった年齢が20代とこれも今回調査した引退杜氏の中では最も若く、２つの意味で「最年少」記録保持者である。

弐彦さんは今回調査した引退杜氏の中で唯一昭和２桁（昭和18年）生まれであり、当然一番若く、現在64歳になる。

長男のため高校に進学させてもらえず、中学校を卒業すると、２年間、両親とともに田畑それぞれ60aで米麦・芋・豆を栽培する農業を行っていたが、３年目の冬に晴気集落出身の杜氏の坂本豊蔵さんの下で働いている知人の蔵人に頼んで坂本さんが杜氏を務める久留米市の富安酒造に蔵人として入った。当時、富安酒造には蔵が２つあり総勢70人を超える酒造従事者が働いていたが、弐彦さんは坂本豊蔵さんが杜氏を務める第１蔵に入った。その蔵には肥前町出身の蔵人が33人ほど来ていた。弐彦さんがこの蔵で３冬蔵人を務めた年に、２つの蔵が統合されて機械化された年間操業（四季醸造）型の新しい１つの蔵が設立されたことに伴って、従業員は全て年間雇用型の「社員」となったため、農業との両立ができなくなることから、弐彦さんは富安酒造を辞めざるを得なかったが、ちょうど納所集落出身の杜氏の中山輝雄さんが蔵人を探していたので、弐彦さんは中山さんが杜氏を務める伊万里市の旭鶴酒造に移った。旭鶴酒造では肥前町出身の蔵人が８人住み込みで働いていたが、地元（伊万里市周辺）からは男性１人と中高年の女性蔵人２人が通勤で来ていた。女性のパート蔵人（蔵女）は、男性蔵人（蔵男）の不足と炊事仕事も兼任してもらうために雇われていた。ここで弐彦さんは蔵一（副杜氏）を務めた。しかし、翌年の冬は同じく納所出身ではあるが杜氏の井上一義さんから誘われて、一義さんが杜氏を務める鹿島市の小柳酒造に蔵一として移った。小柳酒造には納所出身の蔵人が８～９人来ていた。ここで３冬蔵一を務めた年に一義さんが退職したため、弐彦さんはその後任を勧められ、一旦は断ったが、「他から杜氏を迎えると蔵人も入れ替えねばならず」「他人まで影響が及ぶ」こと、また経営主からの信頼も厚かったことなどから、弐彦さんは思い切って杜氏の役を受けることとした。1959年、弐彦さんがまだ26歳の時だった。

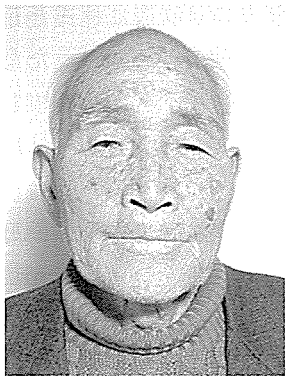
施設園芸（イチゴ栽培）による専業農家化

以来、弐彦さんは19年間、小柳酒造で杜氏を務めてきたが、1988年に突然の奥さんの不幸を理由にここを辞めざるを得なかった。その後は男手だけで農業と子育てをやり今日に至っている。

田畑の面積は以前と変わらないが、1958年頃に15aのハウスでメロン（春）・トマト（秋冬）の栽培を始め、85年にはハウスを20aに拡大し、88年に酒造りを引退してからは更にハウス面積を広げ、また収穫時期の長い作物を求めて肥前町では初めてミニトマト栽培を導入したが、後継者が農業大学校でイチゴ栽培を学んで20歳で卒業・帰省した97年に、それまでのミニトマトをイチゴに切り替え、現在では35aのイチゴを弐彦さん（64歳）と後継者（30歳）と父親（82歳）の３人で切り盛りしている。

また、弐彦さんは農業委員等も務め、地域農業のリーダーとして活躍している。

酒造り人生を振り返り、「蔵人の時には杜氏が年々変わる仕事内容を指示したことに不満を持ったこともあるが、それが将来の杜氏候補者と期待して多くのことを経験させる“杜氏の思い”（愛の鞭）であった」、また「一生懸命やって良い物を作り上げることはイチゴ栽培にも通じる」と語る。



⑪山口徳市さん
大正14(1925)年７月
入野生まれ
82歳

酒造り・杜氏：１酒造場での勤続年数が共に最長

戦前、両親は小作田35aと自作畑35aで米麦を作っていた。地元の入野尋高等小学校を15歳で卒業し、自家の米麦作を手伝っていたが、近所の杜氏・名古屋徳市さんから誘われて、その年の冬から福岡県久留米市の冨安酒造に蔵人として入り、４年務めた。当時、複数の蔵元を擁していた冨安酒造では杜氏の名古屋さんがそのうちの１つの蔵を受け持ち、蔵人は30名ほどもいた。そのうち25人ほどが肥前町出身者で占め、残りが地元出身者であった。

20歳になると徴兵され、中国大陸、台湾に出向いたが、1947年に復員した。山口さんは４男だったが、兄３名とも戦死したため、農家のあとつぎという立場となったため、復員後しばらく自家農業（自作化した田35aと畑35a）を手伝っていたが、ミャンマーの冨安酒造海外蔵元で杜氏をしていた名古屋徳市さんが帰国し今度は戦時中製造製造（整備）になっていたが戦後製造が再開された伊万里市の松浦一酒造の杜氏となり、肥前町内から５名の蔵人を集めたが、山口さんはその中の一人として再び酒造りの仕事を始めることになった。松浦一酒造で杜氏として８年間勤めた1955年に名古屋さんが病気で杜氏を辞めざるをえなくなったため、一番弟子の山口さんが同年30歳の若さで杜氏を引き受けることになった。その後も山口さんは同酒造で杜氏を48年間続け、2004年に78歳の高齢で同酒造を退職し、杜氏生活にピリオドを打った。蔵人時代も含め、酒造り生活は56年間の長きにわたったことになる。しかも、少なからずの杜氏は酒造場の変更を行い、杜氏の酒造場間移動は珍しいことではない中で、山口さんは蔵人時代も含めて１つの酒造会社に半世紀を超える56年間の長きにわたって勤めたことである。こうして、今回の・・・人のインタビュー者の中では、山口さんは酒作り年数、杜氏年数、１社での酒造り年数（勤続年数）のいずれにおいても最長記録を示している。

そして、この間に、肥前杜氏組合長を３期６年間、および佐賀県杜氏組合長を２期４年間努めた。また、この間に２名の杜氏を育成し、世に送った。一人は中山輝雄さんであり、伊万里市の樋渡酒造に杜氏として出て行き、もう一人は井上堺さんであり、鹿島市の光武酒造に杜氏として送った。

息子さん（57歳）は消防署に勤め、お嫁さんは町立保育園の保育士をしており、自家農業にはノータッチだったため、それまで山口さんが田畑それぞれ35aを維持してきていたが、77歳になった2003年に農業は辞め田畑は貸し付けることにした。

山口さんは現在81歳になるが、まだ矍鑠としており、機会あるごとに肥前杜氏組合関係の集まりに出かけ、その歴史を伝えたり、酒造り歌の保存・継承に努めたりと、忙しい日々を送っている。また、酒造りの話を始めるとつい熱が入り、時の経つのも忘れ、止めどなく続き、周りの者から煙たがられていると語る。酒造りが人生そのものであったことの証である。

（かつて山口さんが長く杜氏を務め、現在では井上満さんが杜氏を務める酒蔵、伊万里市、2007年６月）

⑫岩本一雄さん
大正15(1926)年２月
入野生まれ
81歳

弱冠29歳で杜氏に

16歳で入野尋常高等小学校を卒業し、その年は自家の農業を手伝っていたが、集落（入野）内の杜氏の井上諭さんに誘われてその冬に福岡県久留米市の富安酒造に蔵人として出かけ、その後この蔵に４冬通った。この蔵は規模が大きく、中堅の規模を誇っており、複数の蔵を持ち、しかもそれぞれの蔵の規模も大きく、井上杜氏の下に、蔵人が30人ほど働いていた。この蔵には地元（久留米市など）出身者も３～４人はいたが、大半の25人は肥前町出身者であった。一雄さんにとって久留米市は遠くて苦労が多かったため、その後入野出身の井上正雄杜氏を頼って県内の多久市の酒造会社に移り、１冬酒造りに当たったが、その次の年の暮れには、一雄さんは最初に誘われた杜氏の井上諭さんに再度誘われて、伊万里市の樋渡酒造に移った。そこでは肥前町から蔵人が７人来ていた。樋渡酒造では一雄さんは蔵人として３冬働いた。そして1951年に、今度は地元の別の杜氏の名古屋松太郎さんに誘われて、佐賀県酒造研究所に蔵人として４冬出かけた。そのときこの蔵には肥前町から12人の蔵人が来ていた。

そして1955年に一雄さんはいよいよ杜氏となり、鳥栖市の桜源酒造に入ることとなった。そのとき一雄さんはまだ29歳の若さであった。この蔵では肥前町内から12人の蔵人を集めた。そして、ここで一雄さんは杜氏を４冬務めた。その後１冬は伊万里市の松浦一酒造で杜氏の山口徳市さん（⑪）の下で蔵一（副杜氏）を務めたが、その翌（1960）年から大分県の久保酒造に杜氏として出かけることとなり、ここで12年間酒造りをしたため、一雄さんとしては最も長く勤務した蔵となった。ここでは蔵人は地元と肥前町からそれぞれ３人ずつ計６人が働いていた。

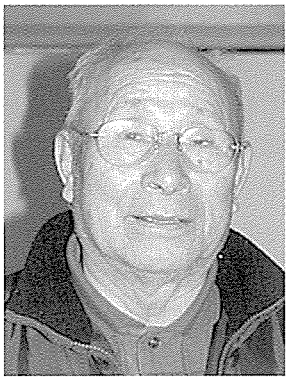
その後1984年に伊万里市のM酒造に杜氏として移ったが、２年後にはこの蔵元が閉鎖されたため、その後10年ほどもっぱら自家農業に従事していたが、1984年に鹿島市の幸姫酒造から杜氏として迎え入れられたため、そこで11冬酒造りをすることとなった。幸姫酒造には蔵人を肥前町から３人連れていったが、地元の鹿島市出身者が11人と多かった。そして1995年に69歳で幸姫酒造を退職し、酒造りの仕事にピリオドを打った。

農業も少し増やす

こうして９カ所の酒造場で通算26年の長きにわたって酒造りにあたり、その間に同じ杜氏の下で働くこともあった。通算９カ所を超えるという極めて多くの酒造所で酒造りを行ったというのが一雄さんの酒造り人生の特徴の１つであるいうことができる。もっとも、１～２カ所ではなく、数カ所の酒造所に移るというあり方はむしろ杜氏の一般的なあり方のように見受けられるが、一雄さんのケースはその典型と言ってよいものである。

また、一雄さんの場合も、酒造り出稼ぎで得た収入を元手にして自家農業の規模を拡大してきたタイプに含まれる。一雄さんの学卒時には父母は田30aと畑40aで米麦農業を行っていたが、一雄さんが農業を引き継いだ後は、葉たばこを増やし、この葉たばこからの収入も含めて、田20aほどを購入し、さらに田を15aほど借地し、米作を55aほどに増やし、また現在ではイチゴを13aほど栽培し、一雄さんと長男（59歳）、お嫁さん（62歳）の３人で専業的農業を行っているからである。

一雄さんは自分の酒造り人生を振り返って、酒は生き物でデリケートなものであり、また酒は蔵元の商品であること、すなわち他人（ひと）の物であるため、酒造りの仕事は大変気を遣うしんどいものであると感慨深く語る。



⑬井上富男さん
昭和３(1928)年６月
入野生まれ
79歳

主に３つの蔵で10年ずつ杜氏を努める

入野尋常高等小学校を卒業すると間もなく終戦を迎えたが、父親が病弱だったので、しばらく家の農業の手伝いをしていた。家の農業は田が30a、畑が50aほどあり、主に米麦を栽培していたが、農業だけでは生活が厳しかったため、22歳の時に、集落（入野）出身者の岩本一男さんに頼んで、岩本さんが蔵一を務めていた福岡県田川市の中村酒造に蔵人として入れてもらった。そこの杜氏は久留米杜氏で、蔵人としては柳川から６人来ていたが、肥前町からも６人出掛けた。中村酒造で富男さんは初めの２冬は一般蔵人を務めたが、３冬目から４冬は腕を見込まれて麹屋の役柄を与えられた。こうして富男さんは中村酒造で６冬酒造りをしたが、次いで1956年の冬は星賀出身の杜氏の北原東造さんを頼って伊万里市の華兜酒造に移り、ここに１冬だけ通った。この蔵の蔵人は全て肥前町出身者で、５人いた。富男さんはここでも麹屋を務めた。次いで1957年の冬は同じ入野集落の井上諭さんに誘われて、同市内の樋渡酒造に移り、ここでも同じく麹屋を務めることとなり、この蔵では８冬にわたって酒造りをした。樋渡酒造では肥前町出身の蔵人５人が働いていた。ここでの仕事が富男さんの杜氏としての修行となり、1965年の冬から、晴れて杜氏として大分県中洲町にある江本酒造に入った。江本酒造には肥前町から蔵人を３人連れていったが、地元の蔵人も１人いた。富男さんは江本酒造で１冬酒造りをしたが、ふるさとから遠く往復に時間が掛かることを苦にして、翌年にはふるさとに近い佐賀県武雄市の牟田酒造場に移り、ここで杜氏を10冬務めた。牟田酒造場では富男さんは肥前町（入野）から５人の蔵人を連れていったが、地元（武雄市）出身の蔵人も６人いた。なお地元からの蔵人は通勤であったが、肥前町からの蔵人は近くても全員住み込みであった。その後、富男さんは鳥栖市の桜源酒造に杜氏として移ったが、ここでは１冬だけ酒造りに当たった。このときには蔵人を肥前町から10人集めた。次の年の冬には富男さんは唐津市内の東木屋酒造場に移った。富男さんはここで10冬杜氏を務めたが、11年目には本酒造場が転業して酒造りを止めたため、富男さんは家に戻り、これまで冬季は酒造りに出ながらも規模拡大してきた自家農業の葉タバコ作80aと50aほどの稲作に専従した。

自家農業は葉タバコ作専業へ

自家農業に専従した翌1988年、伊万里市に再編創業された宗政酒造の方から杜氏として迎え入れられることとなり、富男さんはまた酒造りの仕事を始めることになった。宗政酒造では１冬だけしか杜氏を務めなかったが、ここでは蔵人として地元（入野）から５人集めたが、福岡県出身者も１人来ていた。翌年には西有田町の宮の松酒造に請われ、１冬ここの杜氏を務めた。このときの蔵人は肥前町（入野）からの２人と地元（西有田町）の３人であった。またその翌年には富男さんは杜氏として誘われて鹿島市の富久千代酒造（三十六萬石）に移った。ここで10年間の長きにわたって杜氏を務め、2000年春、満71歳の時に本酒造を退職して最終的に酒造りから引退することになった。こうして、通算49年間、うち杜氏として34年間、酒造りをしてきたことになる。そしてこの間、２期６年間、肥前杜氏組合長を務めたし、何度か全国新酒鑑評会で入賞もした。

その間、自家農業においては、田を若干増やし、また主に畑借地を拡大し、現在では60aの稲作と270aの葉タバコ作（うち畑借地210a）を営む専業的な農家となった。農業の専らの担い手は妻（75歳）と跡継ぎ（　歳）とお嫁さん（　歳）で、お孫さん（　歳）は農協職員。富男さんは現在では農業からも引退したが、酒造りでの収入が自家農業の拡大に貢献したことは言うまでもない。そして、富男さんは自分の酒造り人生を振り返って、蔵人が信用して付いてきてくれるためには、杜氏は偽りのない仕事をしなければならず、これそのものが人生だと思っていると語る。

⑭大浦真之さん
昭和３(1928)年４月
入野生まれ
79歳

小遣い銭を稼ぐために蔵人となる

父親を早くに亡くしたこともあって、働き手が不足し貧乏だったので、子どものころ親からなかなか小遣いをもらえなかったため、必要な金は自分で稼ごうと、尋常高等小学校を卒業するとすぐに、自家の農業を手伝う傍ら、冬場には当時隣町（玄海町）にあった木下酒造に蔵人として入り、酒造りの仕事もした。また戦時中であったため海軍に志願して横須賀通信学校に行っていたときに終戦を迎えたため、帰省し自家の農業の手伝いだけでなく、冬場は木下酒造の蔵人の仕事にも復帰した。木下酒造では納所出身の杜氏の中島虎蔵さんが肥前町から２人、玄海町から４人の蔵人を集めてきていた。真之さんは木下酒造で３冬蔵人を努めたが、その後18歳になった冬は唐津市の太閤酒造に移った。太閤酒造の杜氏は代々「唐津杜氏」が努め、真之さんが入ったときは鎮西町打上出身の日高さんが杜氏をしており、製造量が多いため、蔵人は打上から12～13人来ていたが、肥前町からは２人だけだった。真之さんは太閤酒造で２冬酒造りをしたが、次の年の冬からは町内（晴気）出身の坂本豊蔵さんに誘われて坂本さんが杜氏を努める唐津市内の東木屋酒造場に蔵人として移った。仕事内容は一般雑用係であった。ここでは肥前町出身の蔵人が10人前後働いていた。真之さんは太閤酒造では２冬酒造りに当たった。その後は同じく町内（晴気）出身の杜氏の岩本成男さんに誘われて同じ唐津市内の宮島酒造に蔵一として移った。ここでは肥前町出身の蔵人が10人前後働いていたが、真之さんは蔵一としてここで９冬、いわば杜氏の修業を行った。

病気で倒れ41歳の若さで酒造りを断念

そしていよいよ1959年、31歳の若さにもかかわらず杜氏に推薦されて福岡県嘉穂町にある大里酒造（黒田武士）に行くことになった。当時はいよいよ蔵人集めが厳しくなりつつあったころで、地縁・血縁を頼って肥前町からやっと６人の蔵人を集めたが、地元の男性蔵人１人と成分分析や雑用を担当する主婦パートも２人働いていた。真之さんはここで10年間杜氏を努め、１つの蔵としては最も長い蔵となった。その後、江北町の大隈酒造場（玉菊）から誘われてここに移った。

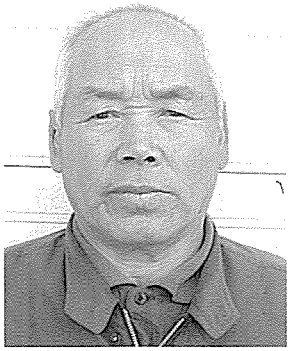
この蔵は製造量が多かったため、真之さんは肥前町から蔵人を16人集めたが、蔵元において地元からも通いの男子蔵人６人を集めてもらった。しかし、ここで２冬杜氏を努め終わった年の夏に脳卒中で倒れたため、やむなく退社するに至った。

闘病しつつ可能な新たな道を模索

その後10年間ほど闘病生活を送り、幸い健康状態も回復に向かったため、その後は自家農業もできるようになり、また惚け防止にと農薬関係の資格取得にチャレンジして見事やり遂げ、その関係の仕事もしながら今日に至っている。

農業の方は、真之さんが学校を出て手伝っていた頃は田畑がそれぞれ80aほどあったが、すでに父を亡くしたため労力がなく、米80aと葉タバコ20a程度しか栽培していなかったことが、蔵人に出る要因の１つになったわけだが、その後、真之さんは酒造りに出掛けていた頃から田を40aほど増やしてきたが、あととり（48歳）と嫁（45歳）は農外就業を専門とし、農業は土日の手伝い程度であるので、農業は主に真之さんと奥さん（75歳）が担っているため、高齢化とともに担い手の脆弱化が進み、現在では田は120aのうち稲作は80aで40aは貸しに出し、畑は80aのうち50aは葉タバコ作農家に貸し、30aは荒れ地となっている。

真之さんは、酒造り人生を振り返り、酒造り、特に杜氏はヒト・モノ・アタマの３つを使わなければならない厳しい仕事であり、自分の病気の原因もこのことを背景とする過労以外の何物でもなく、自分としてはもう少し早く止めていれば倒れなくて済んだのではないかと思ったりもしている。



⑮吉村留一さん

昭和10(1935)年１月
入野生まれ
72歳

父親も蔵人

留一さんは長男だったため、肥前中学卒業と同時に両親の農業の手伝いを始めた。父親はそれまで農業の傍ら冬場には酒造蔵へ蔵人として出稼ぎに行っていたが、留一さんが家の農業の手伝いを３年ほどして18歳になったとき、父の働きかけで、そのとき蔵人として働いていた唐津市の東木屋酒造場の杜氏の坂本豊蔵さんに頼んで留一さんは父親と代わって東木屋酒造場に入ることになった。父と子の交代というわけである。この蔵で留一さんは５冬、使い走りとして酒造りの仕事に従事した。この蔵では坂本杜氏の下で、蔵人は肥前町から10人ほど来ていた。その後、坂本杜氏が福岡県久留米市の富安酒造に移ったため、留一さんも坂本杜氏に付いて富安酒造に移った。富安酒造での様子は、⑩の井上弐彦さんの紹介の箇所など述べてあるとおりである。留一さんは富安酒造で初めの３冬は蔵の仕事と帳簿整理の手伝いをしたが、その後の４冬は麹屋を務めた。

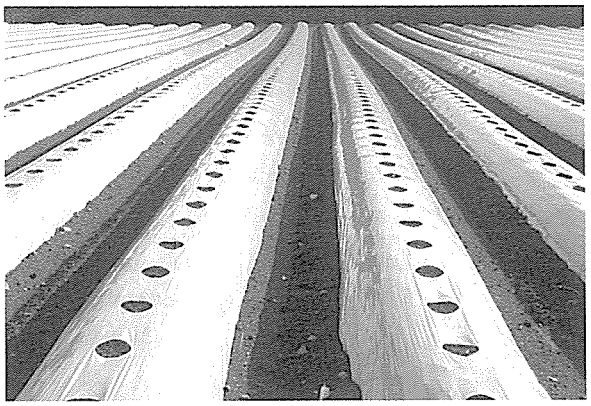
主婦パート蔵人の出現

そしてその翌年、留一さんはその年に杜氏になった近所の大浦真之さん（⑭）に「ひとがいないので」と誘われて福岡県嘉穂町の大里酒造（黒田武士）に移った。大里酒造では大浦杜氏が肥前町から蔵人を留一さんも含めて６人連れてきており、また地元の男性蔵人が１人通いで来ていた。そのほかに成分分析や雑用を担当する主婦パートも２人働いていた。大里酒造で留一さんは蔵一を務めたが、翌年には、杜氏を務める近所の諸岡生治さん（⑯）に誘われて鹿島市の峰松酒造（王将）に蔵一として移った。峰松酒造では諸岡杜氏が肥前町から蔵人として留一さんを含めて３人連れてきており、地元からは男性１人と主婦３人が蔵人として通勤で来ていた。なお主婦蔵人の役柄は船頭（ふながしら：できあがった醪を搾る上槽の責任者）であった。留一さんは松峰酒造で蔵一として３冬酒造りに当たった。そして、いよいよ翌年の1969年に杜氏となって武雄市の百武酒造に移った。百武酒造で留一さんは肥前町から蔵人３人を集めたが、地元からも通いの男性蔵人が６人いた。留一さんはここで３冬杜氏を務めた時点で、1972年に、まだ37歳と若く、しかも杜氏になったばかりで、まだ酒造り人生に未練があったが、子供が大きくなり家にいる多くの時間が必要となってきたことと、また農業（葉タバコ作）の規模拡大によって冬場の出稼ぎが困難になってきたことを考え、酒造りの仕事から引退した。

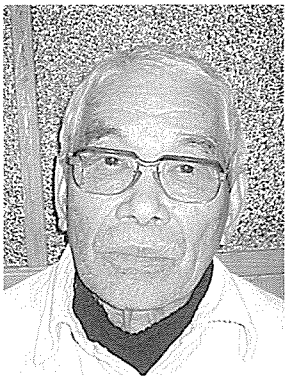
葉タバコの拡大と専業農家化

留一さんが中学を卒業して両親の農業の手伝いを始めたころは、田畑がそれぞれ80aほどあったが、酒造りは冬場だけの出稼ぎ仕事であり、年間の仕事ではないため、いずれは農業での自立化を目指し、蔵人として働いていた時分から、徐々に田畑を購入して増やし、葉タバコ作に力を入れ、長男が農業後継者となってくれたこともあり、その後２ha余の畑借地を行い、現在では米を１haと葉タバコを2.8ha栽培する専業農家となった。農業の担い手は留一さんと奥さん（68歳）、そして後継者（42歳）と嫁（33歳）の４人である。

肥前町が葉タバコ産地であることから、杜氏経験者の中でも葉タバコ作農家は少なくないが、他の葉タバコ作農家も言うように、葉タバコ作の将来が決して明るくないことから、留一さんも葉タバコ作の将来への不安をつのらせている。



（葉タバコ苗植え付け用の穴、肥前町、2007年２月）



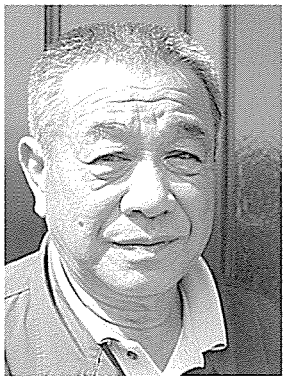
⑯諸岡生治さん
大正12(1923)年12月
生まれ
83歳

戦前、父親の代にこの地に入植し、1938年に諸岡さんが14歳で入野尋常高等小学校を卒業したころは、小作田１haほどと小作畑45aほどを作っていたという。そこで、その年、諸岡さんも父母の農業の手伝いを始めた。もともと本集落（田野）には杜氏や蔵人はほとんどいなかったし、諸岡さんも小柄なので酒造りには向かないと思っていた。ところが、隣集落（星賀）の杜氏の名古屋東八さんからの「人手不足なので」という強い誘いで、その年の暮れから鳥栖市の桜源酒造に蔵人として出かけたことが諸岡さんのその後の酒造り人生を決定づけることになった。はじめは「短期間でいいから」ということだったが、どうしたことか、徴用を受ける1944年まで結局５冬、ついついこの蔵元で蔵人を続けることになったことがその発端となったからである。兵役では、久留米、宮崎、長崎（原爆後処理）と回るうちに１年程度で終戦を迎えたため、家に戻り、その後４年間は父母の手伝いをしながら自家農業に携わっていた。すると今度は、隣村（晴気）の杜氏の岩本平太郎（後述⑱の岩本廣司さんの父親）さんから誘われて、伊万里市の重松酒造に行くことになり、そこで麹屋（こうじや）として２冬働くことになった。そのとき蔵人は肥前町から６～７人来ていた。このころから諸岡さんは酒造りの技術をしっかり身に付けるには技術の確かな杜氏に付く必要があると考えるようになり、ちょうど同市内の蔵元に当時名のある肥前杜氏の名古屋徳市さんがいたため、懇願して1950年暮れに名古屋さんが杜氏を務めていた松浦一酒造に移った。諸岡さんは、ここで初めの１冬は麹屋（こうじや）として働き、その後の５冬は蔵一（副杜氏）として働いた。ここでは蔵人は肥前町から７人来ていた。こうして諸岡さんは名古屋杜氏の下で技術を身に付け、ついに1955年に32歳の若さで杜氏として同市内の前田酒造に入ることとなった。前田酒造ではそれまでは柳川杜氏が来ていた。このことは、伊万里地区においてもかつては大半を占めていた柳川杜氏が撤退し、肥前杜氏が大半を占めるようになる杜氏市場の変化の一こまを示すものである。なお、前田酒造では諸岡さんは蔵人を肥前町から７～８人連れてきた。前田酒造では本社が合併されるまでの８冬杜氏を務めた。1963年に前田酒造等９社が合併されて新たに春秋酒造が誕生するに至ったが、諸岡さんはこの春秋酒造の１つの蔵の杜氏を任されることとなった。そして、この春秋酒造が解散となるまでの４冬ここの杜氏を務めた。ここでは肥前町から12～13人の蔵人を集めた。春秋酒造が解散した1967年には諸岡さんは鹿島市の佐賀銘醸（株）に移った。佐賀銘醸も合併であり、諸岡さんが担当した蔵では地元の鹿島市出身の蔵人４～５人は通勤してきたが肥前町からの蔵人３人は住み込みで働いていた。しかし1982年に佐賀銘醸が解散になったのを機に、体調不良もあったため、酒造りの仕事から引退することにした。そのとき諸岡さんは49歳であった。

酒造りを引退した後は、諸岡さんは別の仕事に就き、併せて兼業で自家農業も行った。農業については、農地改革で小作の田畑を手放したため、戦後は農業はゼロからのスタートとなったが、1953年にかつて入植した周辺の山林を開墾して60aほどの畑を開き、また田を20aほど購入し、稲作も始めた。また1960年代には畑にミカンを植栽し60aほどのミカン栽培を行った。しかし、子弟には農業を継がせず、農業は諸岡さん夫婦のみで行ってきたため、高齢化に伴って、田は借地に出し、ミカン畑は放棄（竹林化）せざるを得なかった。

さて、諸岡さんは酒造り人生を振り返って、この道に人生進路を切り替えた以上、酒造りの人材育成と待遇改善に力を注ぎ、この分野に貢献することが出来たことが幸いだったと語る。それは、人材育成では春秋酒造勤務時代に蔵人の松尾喜一さんを長崎県佐世保の酒造場に杜氏として出し、また待遇改善の面では、杜氏組合での活動を通じて例えば休みなしで正月の仕事に携わった場合に水増し賃金を認めさせたことなどを実現することが出来たからである。

4．現役杜氏



⑰鶴田岩一さん

昭和10(1935)年５月
納所生まれ
72歳

岩一さんは自家の跡継ぎであったため、肥前中学を卒業すると、家の農業の手伝いをすることになった。家の農業は田畑がそれぞれ90aほどあったが、これだけでは生計が立たないため、19歳になった年の暮れに、同じ集落（納所）出身の井上堺さんを通じて、堺さんが蔵人（麹屋）をしていた福岡県大刀洗町の樋口酒造（此乃娘）に蔵人として入れてもらった。樋口酒造の杜氏は地元出身者で、蔵一も地元出身者であったが、その他の蔵人７人は全て肥前町出身者で占められていた。岩一さんは樋口酒造で３冬酒造りを経験したが、その翌年の暮れは、一足早く樋口酒造の蔵人から蔵一として伊万里市の前田酒造に移っていた松尾喜市さんに誘われて、岩一さんは前田酒造に移った。前田酒造（里の露）では杜氏を諸岡生治さんが、蔵一を松尾喜市さんが努めていたが、岩一さんは釜屋を言いつかった。そのほかに肥前町から３人と地元（伊万里市）から２人の蔵人が働いていた。岩一さんは前田酒造で８冬酒造りをした。

その次の年の暮れには岩一さんは大分県中州町の久保酒造（静風）に出かけた。ここの杜氏は肥前杜氏の中山輝雄さんで、岩一さんは蔵一を努めた。久保酒造には蔵人として肥前町から３人が行っていたが、地元からも２人来ていた。岩一さんは久保酒造では１冬酒造りをしたが、翌年の暮れは、初めて杜氏となって入った同じ集落出身者の井上八州馬さんからの誘いで、鹿島市の光武酒造（金波）に移った。光武酒造でも岩一さんは蔵一を務めた。その他の蔵人としては肥前町（全て納所）から６人が住み込みで行き、地元（鹿島市）から４人が通勤で来ていた。岩一さんは光武酒造で13年間、蔵一を務めた。そして光武酒造では、岩一さんは吟醸酒の製造も手がけ、その技術を身に付けた。

吟醸酒製造杜氏としてスタート

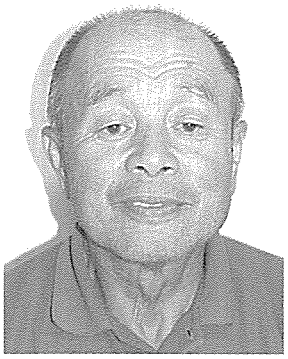
ちょうどその折りに、基山町の基峰鶴酒造でそれまで杜氏をしていた唐津杜氏の野中重馬さんが吟醸酒製造技術を持っている杜氏を肥前町から呼びたい意向を持っていたことから、岩一さんに白羽の矢が立ち、基峰鶴酒造から杜氏としての招請を受けた。しかし、このとき岩一さんは地元の企業への就職の話も進めていたため、杜氏の話を一旦は断ったが、奥さんが、将来性には不安が残るけれども、これまでの経験を生かして杜氏人生を全うする道の選択を支援してくれたため、杜氏を引き受けることを決意した。ときに岩一さんは44歳であった。

そこで、岩一さんは蔵人を肥前町から６人集めたが、そのほかに長く基峰鶴酒造で酒造りをしてきた富士町出身の蔵人２人の９人態勢で酒造りに望んだ。こうして岩一さんは今日に至るまで基峰鶴酒造で25年間酒造りを続けている。なお、その間に清酒の消費量もかなり減少したため、基峰鶴酒造の清酒生産量も縮小を余儀なくされ、現在では岩一杜氏を含め３人の少数態勢での酒造りとなっている。

自家農業はイチゴ栽培で専業化

自家の田畑面積に今昔の変化はないが、1975年ころから稲作減反の一環として施設園芸を始め、作物は当初はメロンであったが、その後ナス、トマトに替え、現在はイチゴを10aほど栽培している。イチゴ栽培の方は専ら後継者夫婦（共に50歳）が担当しているが、岩一さんも酒造りから戻ったら加勢している。

基峰鶴酒造では農大で学んだ専務が技術責任者をめざしているが、将来はこのような「蔵元杜氏」が清酒製造の大半を担っていくようになっていくのだろうと岩一さんは将来像を描いている。



⑱岩本廣司さん

昭和12(1937)年１月
晴気生まれ
70歳

親子２代の杜氏

自家農業は田畑がそれぞれ30aほどしかないため、父親も杜氏をしていた。廣司さんは昭和27（1952）年に入野中学を卒業し、自家農業の手伝いと隣集落のきんちゃく網漁の乗組員の仕事をしていたが、翌28（1953）年の暮れには父親が杜氏をしていた福岡県小倉市の富士本第三酒造場に短期の蔵人見習い臨時職として入り、３冬酒造りを経験した。そのときの蔵人は全て肥前町（晴気４人、星賀４人、納所２人）出身者で占められていた。次の年の暮れは、父親が頼んで廣司さんは小城町の小柳酒造場に移った。ここの杜氏は廣司さんが入った当初は星賀出身の渡辺長治さんであったが、途中でその息子さんの正清さんに代わった。ここでも蔵人は全て肥前町（星賀・入野から10人余、晴気から１人）出身者で、廣司さんは麹屋見習いを務めた。小柳酒造場で廣司さんは６冬酒造りをしたが、次の昭和37（1962）年の暮れには蔵一になって伊万里市の重松酒造場に移った。このとき廣司さんは25歳であった。ここの杜氏は田野出身の諸岡生治さんで、諸岡さんは蔵人を田野から３～４人連れてきていた。廣司さんはここで２冬酒造りをしたが、そのとき２社統合があり、次の年の暮れには杜氏の諸岡さんと蔵一の廣司さんは共に統合された（新）前田酒造場に移り、それ以降45年間、今日に至るまで廣司さんはこの酒造場で酒造りを続けている。

なお、前田酒造場での45年間には、８社合併による春秋酒造場の誕生や、春秋酒造場の解散による前田酒造場の復活といった経営再編などもあったが、廣司さん自身は一貫して前田酒造場の蔵で酒造りを続けてきた。また、前田酒造場では最初の４冬は蔵一を務め、いわば杜氏としての修業を積み、５冬目から杜氏になった。このとき廣司さんは32歳であった。

前田酒造場では、当初、諸岡さんが杜氏を務めていたころや、廣司さんが杜氏になった初めのころは、蔵人は肥前町から10人余り来ていたが、その後の清酒需要の減少と共に造りも減り、それに伴って蔵人数もだんだん減ってきて、現在では肥前町からの２人（蔵一と麹屋）と地元からの１人（釜屋）と杜氏の廣司さんの総勢５人になっている。

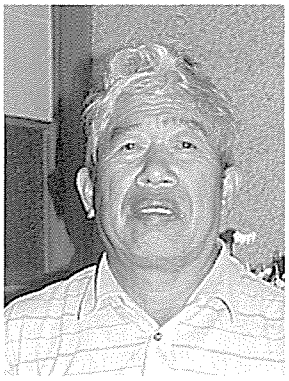
自家農業は田の稲作30aはこの間変わらず続けているが、畑は近所の肉用牛繁殖農家に飼料用として貸し付けた。稲作は普段は廣司さんが管理しているが、田植えや稲刈りの時は奥さんとサラリーマンの２人の息子さんたちが手伝ってくれる。

女性杜氏志願の若手専務との二人三脚での酒造りに意欲を燃やす

清酒需要の落ち込みの中で、本酒造場も蔵人数を半減しつつ生産量を減らさざるをえないため、廣司さんは、最近このような酒造りに意気消沈していたが、５年前に蔵元の娘さんが本酒造場の専務に就任し、しかも技術習得を目指して蔵にも入り、県内唯一の女性杜氏をめざし始めたころから事情が変わってきた。彼女は、東京での学生時代に経験した有田焼の知名度にヒントを得て、有田焼とセットにした酒造りという観点や、地産地消という観点から、消費者重視の新たな商品開発に取り組むだけでなく、酒造好適米（山田錦）栽培農家と消費者との交流会の開催、さらには地域組織にも参加し地域作り活動も精力的に行っている。こうして、目下、本酒造場では若手の専務と古手の杜氏（廣司さん）との二人三脚の酒造りが行われている。

そして、2005年の全国新酒鑑評会で初めて金賞を受賞したり、ある観光・食品部門のコンクールで有田焼とセットの商品が入賞したりして、その成果が出始めている。

70歳になり、引退したい気持ちは山々だが、後継者の専務は頑張ってはいるもののまだ杜氏への道の途上にあるため、もう少し支援が必要であるし、各種受賞も増え、新たな酒造りへの希望も見えてきたため、いましばらく二人三脚の酒造りを続けていくと廣司さんは語る。



⑲坂本幸生さん
昭和13(1938)年５月
晴気生まれ
69歳

親子２代の杜氏

幸生さんは、父親が杜氏であり、毎春、父親が蔵から戻って来たときの自家の人の出入りの多さを見て、杜氏は殿様家業であると思い、酒造り仕事は一生の仕事として魅了あるものに見えたため、自分も将来は杜氏になろうと考えるようになっていた。

また、幸生さんは長男で跡取りであったため、入野中学校を卒業した1954年の暮れに、唐津市の酒蔵で杜氏をしていた父親が隣集落（星賀）にいる叔父の名古屋松太郎さんに頼んで名古屋さんが杜氏をしていた佐賀県酒造研究所に入れてもらった。本研究所での仕事内容は蔵での酒造り作業だけでなく、杜氏・蔵人の食事賄いであった。このとき名古屋杜氏は肥前町から11人（晴気６人、星賀４人、入野１人）の蔵人を連れてきていた。幸生さんは本研究所で２冬酒造りの仕事をしたが、それまで本研究所で幸生さんと同じく蔵人をしていた同じ集落出身の岩本成男さんが57年に杜氏となって唐津市の宮島酒造場（まつら菊）に移ったため、幸生さんも岩本さんに付いて宮島酒造場に移った。本酒造場には岩本杜氏が肥前町から11人（晴気９人、入野２人）の蔵人を集めてきていた。幸生さんは、ここで初めの６冬は一般蔵人を努めたが、７冬目から10冬目までは麹屋を命じられた。こうして幸生さんは本酒造場で11冬酒造りを行った。

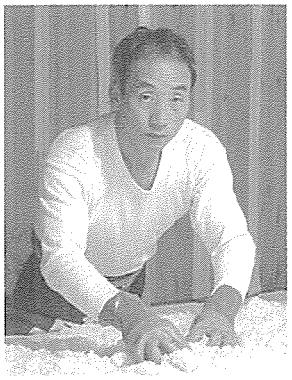
次いで今度は本格的に杜氏の修業を目的にして、中堅どころの酒蔵であった小林酒造本店（福岡県宇美町）に移った。小林酒造本店は２蔵を持っており、１蔵は小値賀杜氏が担当していたが、幸生さんは工場長が杜氏（技術責任者）を努める他方の蔵に入った。この蔵には芥屋（福岡県糸島郡）から12人、筑後から10人の蔵人が来ていたが、肥前町からも幸生さんを含めて４人の蔵人が来ていた。この蔵で幸生さんは、１冬目は一般蔵人、２冬目は酛屋（もとや）を努め、３冬目から帳簿の付け方を教えてもらい、５冬目から工場長に代わって杜氏をやることを言いつかった。このとき幸生さんは33歳であった。こうしていよいよ幸生さんは杜氏となって、肥前町から18人の蔵人を集めたが、地元からの通いの蔵人も２人いた。以後、小林酒造本店で４冬杜氏を努めたが、オイルショック（1973年）の翌74年に、本酒造が機械化によって２蔵を１蔵に集約し、杜氏も１人に減らしたため、その年の暮れには幸生さんはやむなく大分県宇佐市の高島酒造（白鳩）に杜氏として移った。高島酒造には幸生さんは肥前町から14人の蔵人を連れて行ったが、地元からも通いの蔵人が２人来ていた。幸生さんは高島酒造で15年間杜氏を努めた。

次いで、1989年の暮れには、鹿島市の山口酒造に杜氏として移った。ここは小規模酒造所であったため、蔵人は肥前町からの３人と地元からの２人だけだった。幸生さんはここで13年間酒造りを行ったが、酒造業界の不景気を背景に山口酒造は2002年に蔵を閉鎖したため、幸生さんはやむなく福岡県嘉穂町の大里酒造（黒田武士）に移り、現在に至っている。大里酒造には蔵人として肥前町から２人連れて行っているが、地元からも３人（男性）が通勤で来ているし、うち２人は年間雇用者である。

定年制はあって無きが如し

本集落は臨海棚田地域の半農半漁村であるため、田の面積拡大は難しく、また漁業もかつて盛んであった隣集落の巻き網漁業の消滅等によって就業先が激減し、農漁業での経済的自立は困難な状況にある。自家の田60aは変化なしだが、かつて50aあった畑は公共用地転用などで20aに減った。そのような中で幸生さんは、酒造り出稼ぎで得た収入を主に２人の息子さんの高等教育（大学進学）に振り向け、息子さん達には自分の職業を自由に選択する道を与えた。

今日では蔵元杜氏も少なからず生まれてきているが、出稼ぎ杜氏の需要もまだ存在するため、酒造り業界では65歳定年制の完全実施は行われておらず、今すぐ杜氏を止めるわけにはいかないと苦笑いする。



⑳井上満さん
昭和26(1951)年３月
駄竹生まれ
56歳

南部杜氏の差配する日本酒製造の本場・宮城県で修業

満さんは５人姉弟の長男のため、中学を卒業した年の春夏は田25aと畑15aほどの自家農業の手伝いをしていたが、農業では一本立ちできない土地柄（臨海狭小棚田地区）であったため、その年の暮れには姉婿の誘いで隣町（唐津市）の東木屋酒造場に入れてもらった。初めの年は臨時雇用の蔵人だったが、２年目から正式蔵人となり、以後この蔵で14冬酒造りを経験し、自分なりの酒造り人生のベースができあがった段階で、更なる飛躍を目指して次の年には西有田町の森の露酒造に蔵人として移った。この蔵では満さんの酒造りを見て、肥前杜氏の岩本一雄さんからは杜氏交替を、また蔵元からは醸造学校入学を勧められたが、満さんは実地研修が技術習得の最短コースと考え、これらの勧めを断り、次の年には南部杜氏が差配する酒造りの本場である宮城県仙台市の宮城酒類（株）に飛び込んだ。

そこでは杜氏の出身地と同じ岩手県石鳥谷町出身の蔵人が10人働いていた。満さんはここで初めの２冬は麹屋を、次の２冬は酛屋（もとや）を努め、技術習得に励んだ。ちょうど４年目の造りの最中に、静岡県大須賀町の山中酒造という酒造場で杜氏（南部杜氏）に不幸があり後継杜氏を探しているという事態が発生し、満さんに白羽の矢が立ち、造りの途中で急遽山中酒造に出向くこととなった。このとき満さんは33歳であった。山中酒造では無事酒造りを終えることができたため、蔵元からは次年度以降も杜氏の継続を求められたが、ふるさとから遠いことと蔵経営に違和感があったことから、宮城酒類（株）でお世話になった恩師・小田嶋強一・南部杜氏の紹介でその年の暮れには広島市の玉龍酒造（株）に杜氏として赴任した。ここには岩手県出身の南部杜氏系列の蔵人が６人働いていた。満さんはここで１冬杜氏を努めたが、ここもふるさとから遠く、地元での酒造り意欲が増してきたことから、次の年には地元（佐賀県）の鹿島市の富久千代酒造に杜氏として入ることとなった。こうして満さんの地元（九州）での本格的な酒造りの人生の幕開けとなる。

ときに満さんは35歳であった。

またこの間、佐賀北高等学校と修猷館高校の通信制を卒業し、慶応大学の通信制にもチャレンジし、広く知識習得に努めたこと、またそのことが満さんの人生の幅の広がりと酒造り技術の向上の基盤となっていったことにも付言しておかなければならない。

現在、３蔵掛け持ちの酒造り人生真っ盛り

富久千代酒造には満さんは肥前町から３人の蔵人を連れて行ったが、地元（鹿島市）からも通いの蔵男が２人いた。ここで満さんは３冬酒造りをし、次の年の暮れには福岡県飯塚市の瑞穂菊酒造（株）に移った。ここでは肥前町から蔵人を３人集めたが、地元からも２人の通勤の蔵男が来ていた。ここの蔵では満さんは４冬酒造りに当たった。その後は鹿島市の馬場酒造に移った。馬場酒造には肥前町出身の蔵人を２人連れて行ったが、地元からも４人の蔵男が来ていたし、また通勤の社員も２人いた。満さんは馬場酒造では2003年まで10年間杜氏を努めたが、その途中の01年には西有田町の松尾酒造の杜氏も引き受け、01～03年の３冬は両酒造の杜氏を掛け持ちすることになった。また05年からは伊万里市の樋渡酒造の、更に06年からは同市の松浦一酒造の杜氏も努めることとなり、更に06年以降現在までの２冬は松尾・樋渡・松浦一の３蔵の杜氏を掛け持ちすることとなり、こうして現在、酒造り真っ盛りの人生を送っている。

02年には自家の小規模農地は貸し付け、現在は夏場には庭園管理の仕事もやっているが、将来は冬場の酒造りだけでなく、日本酒に関わった仕事を更に増やし、日本酒造りとその普及を中心としたライフスタイルを確立し、すばらしい日本酒文化の継承・発展に力を尽くしたいと熱く語る。

第３章　むすびに代えて

各杜氏の人生は多様であったが、このような行動の背景として我が国の酒造業界の動向が見えてくる。また、肥前杜氏の性格や自家農業との関連における共通性も見えてくる。そこで、最後に、これらの点に言及して、本稿の結びとする。

１．酒造業界の変遷と転機

1973年以降の清酒製造量の減少に対して、酒造場においては、機械化・合理化（少人数化）、合併、委託製造、さらには倒産、閉鎖といった対応が見られた。このような対応の背景には、もう一方で杜氏数の減少という要因も存在していた。しかし、ひとたび、酒造場でこのような対応がなされると、杜氏・蔵人数の需要も減少し、杜氏・蔵人の行き先が狭められ、また杜氏・蔵人の流動性も高まることになる。すると今度は、杜氏・蔵人のなり手が減るという結果を生む。また他方で、杜氏・蔵人を輩出する農村においても、杜氏・蔵人の輩出力の低下という要因も生じてきた。すなわち、杜氏・蔵人は季節雇用であり、雇用条件が不安定であるため、通年雇用形態の職種を求める要求が高まってきたからである。このような要求は特に若い世代において強い。そして、彼らを受け入れるものとして自家農業および地場産業の展開が挙げられる。その結果、若い世代で構成される蔵人のなり手が減ってくる。そうすると、酒造場においても、杜氏・蔵人の安定的確保が困難となる。そこで、機械化・合理化、合併、委託製造といった選択が強化される。かくて問題は最初に戻り、悪循環が繰り返される。

また一方で、杜氏数の減少、蔵人の調達の困難化に対し、酒造場での対応として、女性にも蔵の仕事を手伝ってもらうという対応も珍しくなくなってきた。もともと蔵は「女人禁制」と言われるが、蔵人（蔵男）の減少・調達難に際して、背に腹は変えられず、女性にも蔵の仕事をしてもらうことになる。

２．肥前杜氏の性格

先の表８がそれをよく示していた。

出身集落については、調査杜氏の中では納所・入野といった上場台地上の畑作集落出身者数が、肥前杜氏の起源（ルーツ）と考えられる星賀・晴気といった臨海棚田＝半農半漁集落の出身者数を上回っており、現在に至るほど出身者が上場台地上の畑作集落に拡張してきたことを示している。

蔵人年数は、杜氏になるまでの年数と考えられる。それが10年未満の事例もなくはないが、一般的には10～20年の修業が必要なことが分かる。それでも、多くは比較的若い30代で杜氏になっている。それは、調査事例では全員が高等小学校や中学校を卒業してすぐか、あるいは数年自家農漁業の手伝いをしてからではあるが、10代で酒造りの仕事を開始していたからである。そして、その後杜氏を20～30年務め、60～70代の比較的高年齢に達してから引退する者が多いが、しかし杜氏年数が20年未満で40代で引退する者も少なくない。比較的若くして引退する主な要因は、後で見るように、自家農業との関わりが深い。こうして、蔵人時代も含めて40～50年間という長い間、酒造りに携わる者が多い。なかには50年を超える者も少なくなく、半世紀余りを酒造りに尽くし、まさに「酒造り人生」という言葉がふさわしい仕事である。

酒造りをした蔵の数は５つを超える者が大半である。10カ所を経験された方も１人おられた。

３．自家農漁業との関係
――上場台地農業発展の裏面史――

杜氏の自家農業の展開方向には２つの方向があった。１つは、10年以上の酒造り修業を経てやっと杜氏になったわけだから、本人が杜氏人生を全うできるように家族が支援し、自家農業は自給的な稲作程度に縮小するか、あるいは農業は止める方向である。なお、早い時期に自家農業の後継者が存在した場合は、本人が酒造りに出ている冬場においても後継者を中心に農業を拡大・充実できるため、本人の杜氏人生と自家農業の拡大の両方が可能となったケースもある。

30代は人生の転機の時期である。酒造りは季節雇用であり、また杜氏・蔵人数の需要減もあり、酒造り人生は社会経済的に不安定な面を持っている。蔵人からスタートし、30代に至って、杜氏になって酒造り中心の人生を全うするか、自家農業に専念して専業的な農業を目指すか、あるいは比較的安定的な農外就業に就いて自家農業を兼業

するか、といった選択を迫られる。そこで蔵人の中で少数の者が杜氏となり酒造り中心の人生を歩んだが、多くの蔵人は酒造りから足を洗い、自家農業か農外就業との兼業の道を歩んだと考えられる。こうして、戦後、杜氏数の減少以上に蔵人の減少が見られたのである（註16）。

以上のことを国営上場農業水利事業の推進と関係づけてみるならば、図２に見られたように、同水利事業が開始された1973年以降から肥前杜氏数が急減し始める関係が明瞭に認められる。肥前町ではこの時期からイチゴ作等の施設園芸や葉タバコ作経営が拡大するのであるが、1970年代半ば以降に青年蔵人が酒造りからこのような農業や農外就業へ方向転換をしたためである。こうして肥前杜氏集団のメンバーの減少と地域農業の展開が逆相関の関係で進行していったのである。

【註】

1）小林恒夫「『肥前杜氏』小史序説」『Coastal Bioenvironment』Vol.8、2006年。

2）井上洋一郎「農民出稼の一形態」宮本又次編著『農村構造の史的分析』日本評論新社、1955年、344頁、加藤百一「日本の酒造りの歩み」加藤辨三郎編『日本の酒の歴史』研成社、1977年、41-315頁、藤原隆男『近代日本酒造業史』ミネルヴァ書房、1999年、柚木学『酒造りの歴史（新装版）』雄山閣、2005年などを参照。

3）、4）前掲、藤原著、415頁。

5）前掲、藤原著、414頁。なお藤原は九州杜氏の三潴・芥屋杜氏と丹波杜氏との関係については言及していない。

6）加藤百一「九州杜氏」『日本醸造協会雑誌』第61巻第７号、608頁、および加藤百一「九州杜氏の成立とその背景」『福岡地方史談和会会報』第６巻第２号、1968年、２頁。

7）『伊万里市史（近世・近代編）』伊万里市、2007年、458頁（山田洋氏稿）。

8）『唐津市史』唐津市、1962年、1148頁。

9）三潴杜氏組合は1900年に結成（1912年に再結成）され（首藤謙『三潴清酒の沿革』三潴酒造組合、1953年、46～47頁）、芥屋村酒造杜氏組合は1926年に結成された（『志摩町史』福岡県糸島郡志摩町、1972年、361頁）が、肥前杜氏組合の前身である入野村酒造従業員組合が結成されたのは1933年（1950年に再結成）になってからである。

10）昭和２（1927）年についてではあるが、41人以上の酒造り従業員（杜氏・蔵人）の移動に関するデータが示されており、福岡県から235人が、長崎県から66人がそれぞれ佐賀県内に出稼ぎに来ていたが、佐賀県出身者の41人を超える県内外への移動はなかったとされている（山本熊太郎「『杜氏』の出稼ぎ布（上）」『地理教育』第16巻第２号、1932年、50頁）。明治・大正期の実態が昭和初期まで続いていたと推察される。

11）『佐賀県酒造史』佐賀県酒造組合、1967年、102～103頁。

12）『松浦市史』松浦市史編纂委員会、1975年、466頁。

13）厳密な歴史学的考察を行うには、故人の戸籍謄本（抄本）を参照する等の方法により、年齢の観点から更に確認・検証する必要があるが、本稿の分析ではそこまでは行っていない。

14）時期は不明だが、海外酒造場への出稼ぎ（出張）の事例は、南部杜氏や柳川杜氏においても認められる。前者はビーアンド・エス編『この酒この杜氏』新紀元社、1996年、41頁、後者は『郷土史「はまたけ」』福岡県三潴郡濱武尋常高等小学校、1935年、157頁を参照。

15）小林恒夫「『肥前杜氏』小史序説」『Coastal Bioenvironment』Vol.8、2006年の表２、表３、図４、図６を参照。

16）１）の図４を参照。

【巻末資料】

１．名古屋徳一翁頌徳碑「職歴ノ概要」碑文

「大正五年十二月浜崎町溝江酒造場ニ倉子トシテ入倉。大正七年仝町堤酒造場ニ倉一トシテ勤務。大正九年ヨリ昭和元年迄長崎県北松浦郡御厨山崎酒造場糀氏トシテ勤務。昭和二年久留米市外追分上瀧酒造場ニ研究生トシテ仝三年迄勤務。仝年十二月仝地富安合名会社第二倉酝廻トシテ仝四年迄勤務。仝五年福岡県宗像郡上西郷村畦町中村酒造場ニ仝七年迄杜氏トシテ勤務。仝八年八月富安合名会社第二倉杜氏トシテ入社当時入野村酒造従業

員組合ヲ結成。初代組合長ニ就任シ其ノ間杜氏三十四名ヲ養成斯道発展ニ努力セリ。仝十八年富安合名会社外地派遣ニ伴イ十一月二十八日内地出発ビルマラングーン市マーチャント市街ニテ富安酒造公司デ日本酒醸造ニ精進南方ニ於ケル日本酒醸造ニ成功。銘酒富乃寿ノ名馨ヲ博セシモ終戦ニヨリ仝二十一年五月引揚ゲ本店富安合名会社ニ復帰。当時西第二倉ハ企業整備ノ為仝社退職。当地ニ帰リ休業中福岡県二日市町大賀酒造合名会社杜氏トシテ入社。一ケ年ニテ退職。仝二十二年伊万里市楠久松浦一酒造場ニ杜氏トシテ勤務。仝二十五年第二回入野村酒造従業員組合（杜氏二十三名倉子二百五十名）ヲ結成其ノ組合長ニ就任。仝三十一年度酒造期迄松浦一酒造場ニ勤務」（註１）

（名古屋徳市翁頌徳碑、肥前町星賀、1957年建立）

２．酒造り唄２種（註２）

（１）仕込み唄

一　ヤーレ　祝いな目出たの　若松さまよ
　　ヤーレ　枝もなあー栄えて　ドッコイ葉もしげる

二　ヤーレ　桜よう三月　あやめは五月
　　ヤーレ　咲いてよう年とる　ドッコイ梅の花

三　ヤーレ　わしもよう出しましょう　やぶから笹ば
　　ヤーレ　つけてなぁおくれよ　たんざくば

四　ヤーレ　揃たよ揃たよ　若衆が揃た
　　ヤーレ　秋のよう出穂よりや　まだよく揃た

五　ヤーレ　清きなぁ流れの　肥前の水で
　　ヤーレ　造りなあげたる　ドッコイ佐賀の酒

（２）添えつき唄

一　ハアー　鶴が舞います　この蔵の上
　　お蔵ご繁盛と　のうや舞い遊ぶよ　ソーラエー

二　ハアー　咲いた桜に　なぜ駒つなぐ
　　駒が勇めば　のうや花が散るよ　ソーラエー

三　ハアー　今朝の寒いのに　洗い場は
　　どな方いとしいお方の　のうや声がするよ　ソーラエー

四　ハアー　今が始まり始まりました
　　酒屋男の　のうや酒仕込みよ　ソーラエー

五　ハアー　清酒出る出る　火の口かめに
　　末は座敷で　のうや花と咲くよ　ソーラエー

六　ハアー　揃た揃たよ　若衆が揃た
　　秋の出穂よりや　のうやまだよく揃たよ　ソーラエー

七　ハアー　桜三月　あやめは五月
　　咲いて年とる　のうや梅の花よ　ソーラエー

【註】

（１）句点は筆者が付けた。

（２）山口徳市さん、渡辺正清さん（引退杜氏）より。